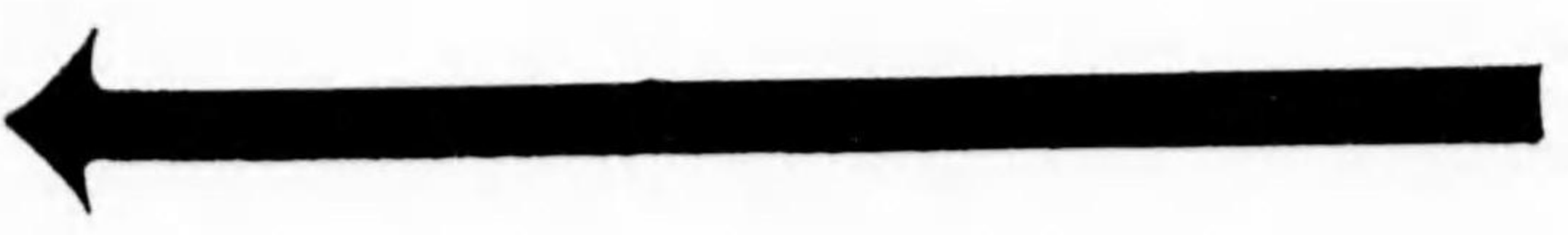
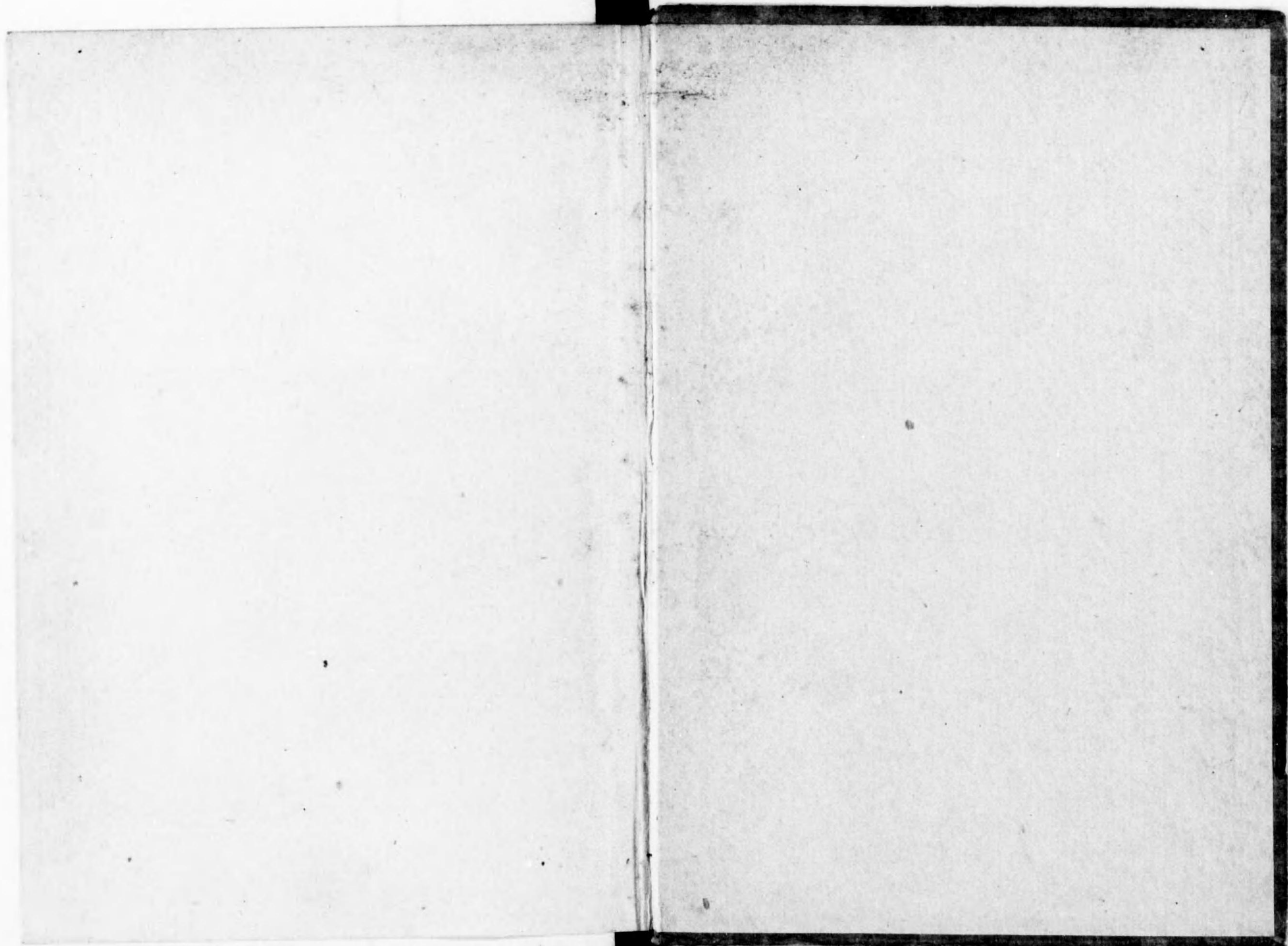


老讀書歷

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

始





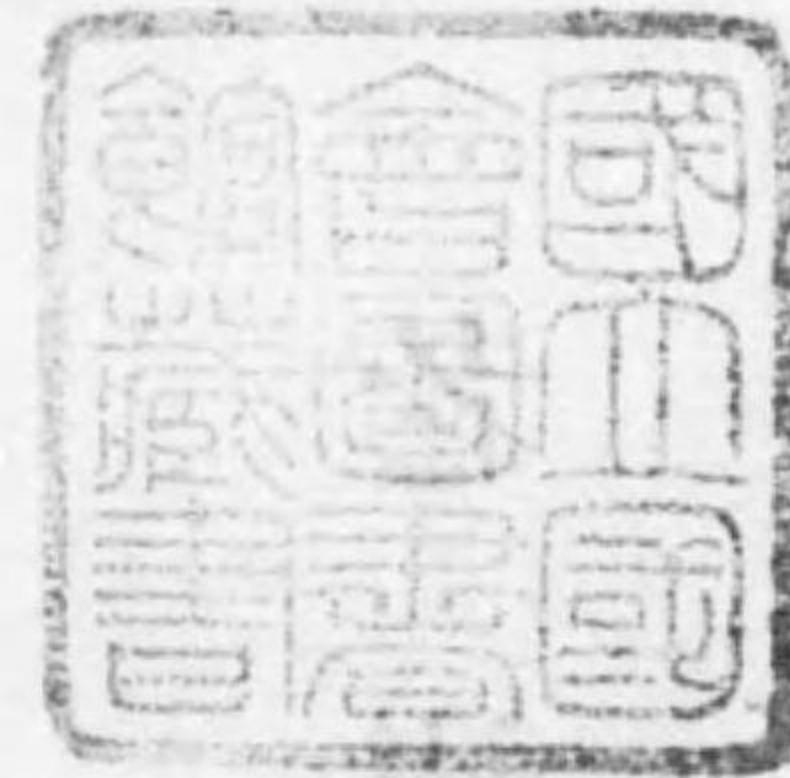
柳田國男先生著作集 第九册

老 讀 書 歷

實 業 之 日 本 社

ASPRS

380
1



題簽

折
口



29926

自序

書物のすきな人はたくさん有る。實によく讀むと私が感服して居る人も、何
十人といふ數であつて、とても背くらべなんか出来るものでないが、さういふ
中でたつた一つ、自分でも驚くやうなをかしい特徴は、この二十幾年の退老期
間に、めつた無性に書いて來た私の序文が、斯んなにまでたまつてしまつたこ
とである。是だけはたしかに本を讀む時間を侵食して居る。少しはこの序文を
書く必要の爲に、氣を付けて細かく味はふといふ利益はあつたか知らぬが、そ
れも結局は大した事でない。しかも一方世の中が是に由つて、何ほどの寄與を

自序

380
1



題
簽
折
口



29926

自序

書物のすきな人はたくさん有る。實によく讀むと私が感服して居る人も、何
十人といふ數であつて、とても背くらべなんか出来るものでないが、さういふ
中でたつた一つ、自分でも驚くやうなをかしい特徴は、この二十幾年の退老期
間に、めつた無性に書いて來た私の序文が、斯んなにまでたまつてしまつたこ
とである。是だけはたしかに本を讀む時間を侵食して居る。少しはこの序文を
書く必要の爲に、氣を付けて細かく味はふといふ利益はあつたか知らぬが、そ
れも結局は大した事でない。しかも一方世の中が是に由つて、何ほどの寄與を

自序

受けるかといふことになる、今はまだ常人以外に、それを考へて見ようとする者は無いらしいのである。

近世四百年の歴史をふり返つて見るのに、書物は出た當座少しばかりの人に騒がれて、やがて一旦の休眠期に、入つて行くのが常の習ひであつた。現在は活版の普及力が強く、人氣の厚薄の差が著しくなつて居るが、是とても瞬く間ばかりで、一たび流行のほかしの外に出してしまへば、浅い埋没は共通の運命であつたことは、不如歸や食道樂などの前例を引くまでもあるまい。その雜然たる大堆積の中から、後世の過去を愛惜する人たちが、辛苦して各その望むものを、搜し求めようとするわけである。以前書籍の分量のまだ今日の百分の一にも達しなかつた時代には、學問の傳統はなほ存して、ともかく私たちの選擇を導かうとして居た。それが世紀の嵐に吹きまくられて、あらゆる道標は倒れ伏

し、岐路は日に多く、新たに鑿開せられたものはどこへ行くのやら、誰もまだはつきり語り得る人が無い。この澎湃たる俗書愚書の氾濫に當面して、果して今でもなほ讀書を人生の至樂、最善の生活利用法などといふことが言へるものかどうか。否と答へる人はもちろん多いのだが、そんなら何とするかといふ段になると、をかしいほど世の中は沈黙して居る。

國會圖書館の新機運は、恐らく遠からず、この問題を處理してくれらるであらうが、少なくとも私たちは皆悩んで來た。折角自由な探求を許されても、是では殆ど手の付けようが無い。自分一人の爲ならば勘のやうなもので、毛ぎらひをしてよし、人眞似をして居てもよい。早目に見切りをつける習慣さへ養つて置けば、時間の損失も少なくてすむかもしれない。たゞ新たにこの道に入つて來る人たちと、怖ろしい毎月の本の増加と、それからもう一つ、著者の古風

な希望とを考へ合せると、どうも今のまゝまでは抛つて置けないのである。書物に百年の後の読者を期するなどは、素より現代の趣味では無い。残るか残らぬかは思つても見ずに、筆を執る人はすでに多い。偶然が貴重なものを烏有に歸せしめると同様に、願ひもせぬものがひよつくり傳はつて、珍重せられるといふ例も折々は有るだらうが、さうかといつて一視同仁に、紙に字を書いたものなら何でもかでも、保存しようとするのは愚であるのみならず、社會的にも宥されない害悪である。必要の有無は分類せられねばならぬ。更に出来るならば精確に、その必要の程度と方向、主として後世のどういふ人たちが、讀めば興味をもち又利益を得るであらうかを、豫め測定して置くまでの用意は、片端から圖書を保管しようとする人々の通れられぬ責務だと思ふ。私なんかの判断は屢々誤まつて居るかもしれぬが、ともかくも單なる廣告文、又は出版祝賀會

の挨拶のやうな、社交式序文は一つも書いて居ない。碌な索引も解題書も無く、當てもなく一生搜しまはり、御蔭で研究が脇路に逸しやすく、間口ばかりが徒らに廣くなつて、まとまつた仕事の一つも出来なかつた罪滅ぼしに、せめては少しばかり斯ういふ序文を書く風を、他の色々な學科の上にも、はやらせて見たいといふのが念願であつた。果して其結果はどうであらうか。本を書くやうな私の知友中には、名を知られずして世を去つた人が多く、又は外部の故障のために、途中で學業を廢した者も稀で無い。斯ういふ人たちの著述は殊に埋没しやすい。第一に自分のこの本なども、果していつまで残つて居るか、おぼつかない限りではあるけれども、ともかく今度の戦争になる以前、一度は日本の文運が、斯ういふ方向に進まうとした時代もあるといふことを、近い未來の讀者たちに傳へることまでは出来ると思ふ。是を今少し續けて見ることにし

てはどうであらうか。單なる毎日の讀書日記よりは、この方が身が入つて面白くはあるまいか。

昭和二十四年三月

柳田國男

目次

自序

批評集

應野つぎ著『子供と四季』……………一
 中西悟堂著『野禽の中に』……………二
 山階芳麿著『日本の鳥類と其生態』……………四
 小寺融吉著『郷土民謡舞踊辞典』……………七
 目次……………一

福永恭助共著『口語辞典』……………九
 岩倉具實
 東條操著『方言と方言學』……………二一
 小谷方明著『大阪府民具圖録』……………二四

序 跋 集……………一九

田中喜多美著『山村民俗誌』……………一九
 山口貞夫著『地理と民俗』……………二三
 檜木範行著『日向馬關田の傳承』……………二六
 江馬三枝子著『飛驒の女たち』……………三〇
 瀬川清子著『海女記』……………三四
 能田多代子著『村の女性』……………三九

大藤ゆき著『兒やらひ』……………四
 女性民俗學研究會編『女の本』……………五
 高田十郎著『隨筆民話』……………五
 別所梅之助著『地を拓く』……………七
 福原信三編『武藏野風物』……………七
 川崎隆章編『岳』……………八
 松木時彦著『神都百物語』……………八
 辻本好孝著『和州祭禮記』……………八
 須山計一共著『信濃の祭』……………一〇
 諸田益男共著『信濃の祭』……………一〇
 中山徳太郎共編『佐渡年中行事』……………一〇
 青木重孝
 日本放送協會編『日本民謡大觀關東篇』……………一七

小笠原謙吉著『紫波郡昔話集』……………二二五

鳥袋盛敏譯『遺老說傳』……………一九

水原岩太郎著『備中土面子の圖』……………一三五

石川縣圖書館協會編『町村誌編纂の栞』……………一四〇

岩手縣教育會編『九戸郡誌』……………一五二

九戸郡部會編『百穂手翰』……………一五六

富木友治編『百穂手翰』……………一五六

佐藤氏日記『蒜澤歲時記』……………一六六

川口孫治郎著『日本鳥類生態學資料』……………一八九

小林保祥著『高砂族バイワヌの民藝』……………一九七

柳田國男編『沖繩文化叢說』……………二〇四

太田陸郎著『支那習俗』……………二〇七

解題集

帝國文庫『紀行文集』……………二二三

赤松宗旦著『利根川圖志』……………二三四

根岸守信編『耳袋』……………二五〇

横山重編『琉球史料叢書』……………二六五

田邊 泰 共著『琉球建築』……………二七一

巖谷不二雄 共著『琉球建築』……………二七一

館柳灣著『林園月令』……………二七三

讀書雜記

書物が多過ぎる……………二七九

書物を愛する道

二九二

古典の發掘

三〇六

索引

三二二

批評集

鷹野つぎ著『子供と四季』

何か心を静かにするやうな本が讀みたいといふ人に、鷹野さんの『子供と四季』などはどうであらうか。この本の微笑ましい思ひ付きは、遅生れの女の兒の八つの年、ちやうど母の膝から離れて、廣い大きな學校に入つて行く後先あとさきの、何もかも印象の鮮あざかだつた一年を、御正月から順々に思ひ出すまゝに書いて見た點である。これに年を取つてからの咏歎が添へられると、平凡にもなれば又人くさくならずにも居なかつたらうが、筆者は女性にも珍らしいほどのつゝまじさを以て、有りのまゝのものを取出して、讀者と共に眺めよう

子供と四季

一



として居る。多分はそれから後の三十幾年かの生活變化が垣になつて、自分でも隣の園をを見るやうなよい感じがしたからであらう。濱松が今見る目まぐるしい工業都市となる爲に忘れてしまはなければならぬ者は多かつたことと思ふ。それをよいことだ、是非ないことだと思つて居る人でも、僅か半世紀以内に同じ土地に、斯うもちがつた二つの生活面が存在し得るといふことを、示されるだけなら興味を持つであらう。さういふ歴史の説き方が一般にやゝ衰へて居るのである。見たところ何の目的も無い昔話でも、鷹野さんのやうな態度でするならば意義のある試みだと言へる。女はいつでも子の時代、孫の時代の爲に考へて居るのだが、實は今までは餘りにも考へる材料が乏しかつたのである。

中西悟堂著『野禽の中に』

中西氏の探鳥紀行には、眞似まねられない幾つもの特色がある。第一に場所が珍らしく、方法が又奇抜で、觀察の爲には勞苦をちつとも省みない。それに加ふるに詩人風な物の感じ方、自然に對する通俗以上の同情が、忽ちにして讀者と現世の外の悅樂に誘引する。殊に羨ましいのは澤山の鳥ばかりか、草でも虫でもみんな名を知つて居ること、もとより永い歲月の修練がかゝつて居るからであらうが、是ぢや成るほど面白いはずだと、誰にでもすぐ考へさせる。しかもその面白さを出来るだけ手軽に、我々に分たうとする用意が、この本などにはよく窺はれる。鳥の言葉と舉動とを、精確に且つ覺えやすく、書き止めて置かうとした努力が、恐らくは『野禽の中に』の、最も有難い素人向きであらう。御蔭で我々はもう幾つか鳥を友だちにし、時たま庭の樹に來ればあゝ來たなと、思ふことが出来るやうになつた。鳥が少なくなり又せか／＼するやうになつたことも事實だが、それよりも今まで氣が付かずに居た方がもつと淋しかつたのである。御藏島みくらじまのあちら側とか、陸前足島あしじまの無人島などこそ、然らば行つて見ようといふわけにも行くまいが、近くは東京大

阪の郊外の、日返りでゆつくり出かけられる海邊や田圃たんぼ中にも、中西君が心ゆくばかり楽しんで来た、鳥の世界はまだ廣々として居るのであつた。ブラインドを背負つて林の中は一日立ち盡すといふまでの辛抱は出来なくとも、せめては三步か五歩山路で足を緩め、又は始めからがやくとした仲間に加はらずにあるいて見る氣にさへなれば、ハイキングにも又新しい意味が生ずる、といふやうなことを、この本は強く暗示しようとして居る。在來の鳥好き連ばかりに、讀ませて置くのには全く惜しいと思はれる本である。

(「東京朝日新聞」昭和十六年九月二十九日)

山階芳麿著『日本の鳥類と其生態』

完備した體系に由つて、我邦鳥學の最近の到達點までを記述したものの、解説は平明で簡

切、數百の寫眞と彩畫の中にも、印象の深いものが甚だ多い。全編は五卷、今度新たに出た第二卷は千頁を超える大冊である。昭和九年に始めて第一卷の出たときにも、我々は既にその竝々な努力に推服したのだが、今日の時勢に於てなほ着々と同じ道を前進し、更に斯ういふ行届いた續卷を公けにせられたといふことは、殆ど奇蹟にも近い事業であつて、どの點から見ても山階侯爵なればこそといふ感を抱かずには居られぬ。戦時日本の文化學藝を、後世から回顧した場合の最も耀かしい目標であり、同時に又科學の研鑽に全力を打入れる人々に取つて、寔に心強い御手本を示されたものといふべきである。殊に貴とく思はれるのは、一つの學問に對する熱意と忍耐、如何なる片隅の小さな記録をも見落さず、それ／＼報告者の名を揚げて其功績を録し、しかも獨自の判断を以て取捨を決して居られる態度で、是が地方の埋もれたる研究者への、大きな獎勵であり又慰藉であることは恐らくは著者の想像を超えるものがある。たつた一つ残念な點はこの書物があまりに貴重であり又部數が限られて居る爲に、あまねく普通讀書人の間に流布し得ぬことであるが、

斯ういふ出版物こそは圖書館が仲介の任に當つて、徒らに好事家の襲藏に没し去ることを防がねばならぬ。華胄界の學者は概ね名利に淡く、従つて著作が如何に有効に頒布せられ讀むべき人の手に届いて居るかどうかといふことを顧念せざる嫌ひがあつたが、一方世間の多數者もたゞ評判を聴き、詳しく讀んで見る折が無い爲に、いづれさういふ御方ならば澤山の助手を使ひ、たゞ指圖をして代筆せしめられたものゝ如く、速断してしまふ傾きがあるかと思ふ。それは事實で無いのみか、この一書に至つては明白なる反證がある。著者侯爵の精緻なる感覺は、文章の端々に流露して居る上に、挿入の寫眞は大部分が自作であり、十數葉の彩畫は、すべて侯爵夫人が自ら版下を描いて居られる。是が又小さからぬ感動を讀者には與へる。

〔東京朝日新聞〕昭和十六年八月十一日

小寺融吉著『郷土民謡舞踊辭典』

いはゆる民謡を我々の祖先が、どれほどまで珍重して居たかといふことは、單に名稱の側からでも考へて行くことが出来る。是はよその國々と是非比較して確かめて見たい問題だが、日本では今でもまだ民謡を意味する總稱の語は無く、しかも一方に一つ／＼のウタに皆名が出来て居る。信頼し得るやうな簡明な辭典が、何よりも必要であつた理由である。小寺君の編述には、少なくとも其要望に合すべく、非常な勞苦が重ねられて居る。五百頁四千以上の語彙は、もちろん其數だけの獨立した音曲詞章が、並び行はれて居たことを意味しないが、我々の保存と傳播、採擇と應用と加工とには、必ずそれにふさはしい名が設けられて、決して丸呑にはして居なかつたといふことが是でわかるのである。この相互の脈絡と系統を明かにすることは、民謡研究の骨子と謂つてもよい。獨り前代人の感情

の中に醸された旋律が、幽かな線を引いて今日に繋がつて居るのみでなく、歌の文句の完全なる新語化方言化の底からでも、なほ時々千年以前の人の、やさしい心持が掬み出される。横にこれほど足早く移つて行く流行歌があつて、堅には忘却と失念としか無いといふことは考へられない。たゞ是を比べ合せ尋ね究めて見ようといふ小寺君の如き人が今までは得られなかつただけである。その大きな事業の手始めとして、斯ういふ辭典の入用なことは明かである。それが熱心な改訂を重ねて、まだ完備とまでは言へないといふのも、我々にとつては寧ろ楽しみである。書物の名としては、以前の『日本民謡辭典』の方が、私は適切だと思ふ。舞踊は又別途の研究法があり、且つ資料もまだ出揃つたとは言へぬからである。それから今一つは野口西條等の文人の、小唄と稱する民謡風の作歌を數多くまじへて、辭書の目的を煩雜にしたのは不利であつた。あれだけは別に一冊にして居たら、重寶がる人が或は多かつたらうと思ふ。

〔東京朝日新聞〕昭和十六年九月八日

福永恭助共著 『口語辭典』
岩倉具實

今までの字引ではかつてしなかつたことだ。この本は人を諫め、又深く考へさせようとして居る。文章を読んで聽かせて、女や子供にも皆合點が行くやうに、すべて常日頃の言葉で書かせようといふのだから望みは大きい。従つてむづかしい仕事だ。半分でも當つて居たら御祝ひをしていふ。

第一に今日多數の原稿書きが、いま自分の試みて居るやうに、一々口語辭典で忠告して居る語をさけて、おとなしく書くかどうか疑問である。現に今日はイマドキ、多數はオホク、原稿はシタガキ、忠告はイサメル、疑問はウタガヒなど、なほすにも及ばぬぢやないかと私なども思つて居る。もう少しゆるやかであつてもよい。明治は無茶に漢語をはやらせた時代であつたが、それでも日本人は慧しい國民なるが故に、差支の無いものだけは追

追に話言葉にして使つて居る、それをも捲き上げようといふのはちとちよん髭が過ぎる。

英和、和佛などの例にならふと、この本は文口辭典と呼べるべきものである。別に今一つの口文辭典、もしくは本當の口語辭典が我々は欲しい。それによつて第二千六百年の話言葉はもう可なり豊かで、多くの造り字は無用だつた事を思ひ知らせると共に、名詞ばかりが多くて動詞形容詞などが乏しいことを明かにし、早く我々の忘れたものを取戻す願ひを抱かせるやうにしたい。むやみな言葉直しはたゞ試みにしても人に嫌はれやすい。だから私たちの集めようとして居る國々の方言の中から、既に本物の話言葉になつて居るものを拾ひ出して、大いに使はせようとするのも、きつと岩倉、福永二君のやうな人であらうと思ふ。

何れにしてもこの二人の「編み手」の意氣込にはシゾコナヒ（失敗）によつて、貴いアチ（經驗）を得られんことをアテニスル（期待する）。

〔東京朝日新聞〕昭和十五年二月十四日

東條操著『方言と方言學』

此書物の標題及び世に知られた著者の名、これだけが既に内容を説明する。此本くらゐ紹介の不必要な、さうして又批判の必要な本は他には少いと思ふ。私は友人だから却つて禮讚が出来ない。僅に最少限度の價値を明かにして新たな讀者の豫想を保障するまでゝある。第一に日本の方言研究の現状、その今日に到達した経過と左顧右眄、それを詳かに知ることはこれ一冊で十分だと言ひ得る。著者がその殆ど全部に參與してゐるからである。

時代が冷淡でありもしくは早呑込であつて、まだまだ將來の發奮を期すべき事業ばかり無數に取殘して居ると謂つても、これは少しでも東條氏の責では無い。

誰よりも多く辛苦し、しかも尙この學問の意義と興味とを、熱心に説いて止まないのが

彼だからである。第二には言語地理學といふ事新しい名稱は、日本で活字になつてから十數年にしかならぬが、著者は三十年以上、づつと續けてその實質を講究して居る。關譯はよその事だから参考にしかならない。

是を日本の言語にあてはめて見ようとする人は、今までは何れもをかしい程めいゝの猫の額を引伸ばさうとしている。その様な片隅の小さな事實が、言語地理學である氣づかひは無い。ところが今度の東條君の著述で始めて全國各地の方言の比較が出来、いよゝその地方毎の變化にも、隠れた法則があつたといふことが明かになつたのである。此書の説明は十分に要を得て居る。

誰でも之を讀むと、どうして國語が斯うなつたかを考へずに居られない。或意味からいふと學問の夜明けである。

第三に國語の歴代の變遷が、今ある各地方の言葉の相異と無關係でないことは明かで、その事實と文獻の二つの方面から見に行くことが、我々の知識を正確にすることも亦疑ひ

が無い。所謂方言文學に對する東條氏の着眼は鋭く、其取扱ひ方も親切で要を得て居る。慾を申せば之以上に、方言でない文學もやはり斯うして研究すべきものであること。

次には方言の文學などは實はぼつちりで、是ばかりを穿鑿して居ると道樂に陥りやすくて珍木屋の御客になつてしまつて、大した成績の擧がるもので無いことを注意して置いて貰ひたかつた。

方言といふものゝ範圍及び方言區域の存在に付いては、東條氏は私と反對の意見を持して居られる。前者は用語の問題だから何とでも折合がつく、後者は判斷の問題だから、必ずどちらかの一つに決しなければならぬ。さうして方言區域説の理由づけは、今はまだ後の御樂しみに残されてゐるのである。

小谷方明著『大阪府民具圖録』

農具は金屬を使用する部分があるので、夙くから商人の手にかゝつたものが多かつた。専ら土地の生産物を材料とした容器運搬具などと比べて、地方性の少ないのは誠に已むを得ない。それにも拘らず、今まで知られて居るだけの品目、又同じ名をもつものゝ形状大小にも、既に驚くほどの變化が見られるといふことは、たしかに日本の農民の改良に遲鈍でなかつた證據であつて、同時に又近世三百年の埋もれたる文化史の史蹟でもあると思はれる。私たちの想像では、江戸期の平和時代が急劇に此改良を爲し遂げたと同じく、京畿周圍の繁昌した農村地帯が、事實に於て此等の新工夫の試験場であつたらしい。それが今後も亦率先して、次の新考案の採用に進まうとして居るのだから、急いで今のうちに詳し

く此方面の足跡を尋ね、且つ之を記述して置かなければならぬわけである。私が京阪方面の有識者たちに向つて、他にも試みたがつて居る新事業が多いのを知りながらも、なほ何よりも先にその農村の傳承蒐集を、勧めようとした動機は爰に在つたのである。

濫澤氏の研究所で前年出された民具問答集のやうな標準圖録が、ほど全體に亘つて示されて居ると大へん都合がよいのだが、曾て農商務省でも之を企て、まだ印刷にならぬうちにたしか大震災で焼いてしまつたかと思ふ。已むなくんば古い和漢三才圖會などで辛抱してもよい。とにかく動植物でいへば分類標目のやうに、一つの臺本があつてそれだけでは見ることが出来、地方では各自それと異なる種類の農具、形の差異、鋳でいふならば角度とか長さ幅とか、もしくは名稱及び之を使用する場合の、ちがつて居るものだけを精確に報ずるやうにしなければ、讀者がたびたび同じ事をくり返して教へられる迷惑はさておき、第一に土地毎に親切で閑のある人が有るわけでも無いのだから、いつ迄たつても國全體の實情はわからず、又或一つの土地の報告が、どれほど價值のあるものやらも知る

折は無いのである。さうして千差萬別の民間の大小用具が、假に片端から明白になる日が来るものとしても、時が人間の二代も三代もかゝるやうでは、其間に又變遷があつて比較の利益が少ないのである。

だから最初によく考へてかゝるべきことは、何を目的に我々が斯ういふ蒐集をしなければならぬかといふことである。私は是を簡単に日本人の智能、新しい必要と環境とに適應して、どし／＼と今まで具はつたものを改良して行かうとする意氣込、手馴れたものでも思ひ切つて棄て、よそにより良きものがあつたらそれを採用しようとする研究心が、どういふ風に農事の方面に現れて居るかといふこと、是を外側から見れば日本は狭い國だが行く先々の天然の事情がちがつて、たとへば鎌一つでいへば火山灰地と砂地、谷と沼跡とでは同じ物が使へないといふ場合に、人はどれだけ新しいものを案出し、又どの程度まで古い民族的の一致を忍ぼうとしたか、即ち生活技術の進み歩んで來た道筋を究めることに、我々の目標は置かなければならぬと思ふ。中央から離れた田舎の悠長な農民の中にでも、

斯ういふ判別と改良とを斷念して、我慢して親護りの仕來りに取附いて居る者はもうよほど少ない。ましてや競争も刺戟も多い近畿の平野で、何代と無くこの努力がくりかへされて居たとすれば、其痕跡は必ず鮮かに残つて居る筈である。私たちが是非とも知りたいのはそれである。個人の努力が學問であるか、はた單なる物ずきであるかの別れ目は、それを見る人に新たに何等かの知見を開かせるか否かに在ると思ふ。是が人間の勤勉と辛苦、殊に環境に打克たうとする力限りの考案の跡を、見究めさせる資料にもし役だち得るとすれば、農具の蒐集圖解といふやうな小さい仕事でも、決して無意味な道楽だとは評する事が出来ない。たゞ其爲にはどこが改良であり、又どこが必要なる變化であつたかを、説明し得るもので無くてはならぬと思ふ。

(昭和十四年三月九日)

序 跋 集

田中喜多美著『山村民俗誌』

此書の著者が考へて居るやうに、山が我々の村生活の、約半分であつたことは事實である。たゞ其山から莫大な土が流れて、廣々とした平地の村を築き上げ、一方には又盛んに市人が去來して、往いて自ら採ることを必要としなくなつた爲に、國土は次第にその外貌を改め、後にはさういふ新たなる邑居が、日本の農村を代表する迄になつたのである。村の古代の結合組織が、今尙山地に據つて生を營む村だけに、僅かに保存せられて居る理由は爰に在つた。それを我々はもう忘れてしまはうとして居るのである。

九州の南部では、狩獵の團體の名が普通りにカクラであり、同時に其カクラは又小部落をも意味して居る。それが私たちには不思議でならなかつたが考へて見ると寧ろ當然の事である。村は神祭りや婚姻の便宜といふ點を除けば、主として此類の山の作業の爲に、協同することが最初からの目的であつたのである。以前私などが山民の心理といふことを説いて、力を山間の一つ家の生活に、傾けようとしたのは思ひ違ひであつた。さういふ生活も今は滅びかゝつて居るけれども、是は中代の武士の没落、さては火術の普及などに伴うて、新たに始まつた様式であつて、多くの山村は又別個の起原を遠い過去に持つて居るからである。

田中喜多美君の舊著「山の生活」は、會て私の愛讀書のみならず、其頃この書齋を訪れた程の人は、何れも勧められて一度はあの書物を見て居る。どうして其様に我々が是に心を惹かれたかは、細かに分析して見ないと今でも其原因を知り難いが、一つには著者が實驗といふ以上に、自身此事實の中に生れ且つ活きた人であること、それが民間傳承學の黎

明に目覺めて、始めて自ら識らうとした内容の記録だといふことが、この萬卷の古書新書の堆積裡に在つて、尙且つ一道の微光を放つて、人の眼を引寄せた力であらうと思ふ。それから今一つ著者が豫言者でも無く、又達識の士を以て目すべき人でも無いのに、その諄諄として説く所が、偶然にも國內の既に知られて居るものと合致し、更に隔絶した府縣の隅々に於て、新たに觀測せられ、又採録せられようとして居るものと、一々に相呼應し映發するらしいことが、少なからず我々を驚歎せしめる。是は日本人が一つの種族、一つの文化團の屬員である以上は、何等の奇妙で無いと言へば言はれるが、少なくとも現在の事業に携はるほどの者は、大概是是をさういふ風には思つて居ない。それ程にも知識は個個の邊陲に眠つて、辛うじて孤立の篤學者のみを自得せしめて居たのである。天下萬人の生活觀測者が各々その遼東の豕を抱いて還るに及んで、始めて我々の學問は完成するのであるが、それは末遙かなる未來である。今は單に前代の尋常平凡事が、既に我々の間に珍重すべきものとなつて居たことを、心付いたゞけを以て満足すべきである。

地方の熱心な多くの採集家は、最初は歓迎せられ又大いに利用せられ、後いつと無く見失はれて居る。是は甚だ不本意なことであるが、さういつ迄も一區域の調査を、同じ方法と態度とを以て、續けて行くことは出来ぬ故に、後には外部との交渉が絶えてしまふのである。田中喜多美君は壯齡にして氣魄に富み、しかも此仕事は一旦是で片づいた。此次にどう出て行くかは我々全體の問題でなければならぬ。今まで見て來た現象の意味を問ふ爲に、弘く他の地方との異同を比較して、文化展開の経路を明かにするか。はた又我脚下を一段と深く掘り下げて、旅人にはわからぬ趣味と批判、その他あらゆる心意上の事實にまで入つて行くか、何れを擇ぶにしても其途は既に具はり、其資格も亦たしかに有る。要は唯永く一處に掩滞しなければよいのである。學問の漸く熾んならんとする時世に生れ合はせ、事業は認められ辛苦は酬いられ、しかも郷土の爲に傳ふべきものを傳へて、大いなる激勵を嗣いで起つ者に與へ得たといふことは、誠に爽快なる一成功に相異ないが、しかも丈夫の生涯の企畫としては、是はまだ僅かなる一つの段階に過ぎない。私は寧ろこの著者の

の餘力の尙豊かである點を羨みたいのである。

(昭和八年初冬)

山口貞夫著『地理と民俗』

風土が人間の現世相を説明し、更にその知識を足場として、國家將來の計畫を正導することも出来るといふことは、決して新たに生れたる學問の希望では無い。自分などが物覺えてからの五十餘年、いはゆる人文地理學の進路は、いつでもこの希望を確實にする方向を指さして居た。さうして古人のあまりにも大まかな、少しは身勝手の加はつた推斷がどこまで當つて居たかを見究めることを怠らなかつた。豫言はどの様にも人を樂しませることが出来るものだらうが、當ると信じさせなければ安心にはならない。故に先づ目前の

既に現はれて居る事實に就て、我々の法則の一般に眞なることを證出する必要があるので、人國記一流の空漠なる知識の上に、打立てられた理論などはあぶないものである。地理が人生の多くの疑問を、釋いてくれるであらうといふ山口貞夫君の確信は、時代の何人にも譲らなかつたと思はれるが、私がそれに大いなる望みを寄せることが出来たのは、全くその飽くことを知らぬ知識慾の爲であつた。如何なる小さな事實でも行つて自ら確かめるか、少なくとも無数の類例の比照に由つて、その存在を明かにしなければ論據にはしなかつた。それが學問の資料のまだ十分に豊富にならぬうちに、僅かに言ひ得ることだけを言つて過ぎ去つてしまつたといふことは、いかに嘆いても嘆ききれぬ悲みである。

大小の離れ島に離れて住む者の、淋しい生活を觀察しなければ、國土環境の深い恵みを會得することが出来ぬといふのが、山口君と自分等との一致した考へ方であつた。たつた二年しか續かなかつたけれども、其爲に我々は『島』といふ雑誌を經營して居た。さうして其間に於て最も多くの島々を、純一なる學徒の眼を以て見てまはり、幾多の清新なる印

象を記録したのは彼である。全國五十の特に世に知られざる山村に、同時探訪の計畫が實現した際にも、山口君は羽前の安樂城、豊前の伊良原、次で伯耆の中津等の調査を分擔して、それ／＼綿密なる手帖を留めて居たのだが、その資料は自身に十分の利用が出来なくて、たゞ問題の興味を同志の間に引繼いで居るに過ぎない。この書を読む人の直ちに心づくであらう如く、山口君は勇敢なる旅客であると同時に、最も精勵なる書齋の闘士であつた。人と會するの日は耳を、途を行くときは目を主力として、多く知り少しく語り、内に生命の促進を感じつゝも、強いて功程を急がうとする風が見えなかつた。恐らくは學問の歸趨が彼には夙に明かであつて、前人後人が此の如く相助け、積み上げ、ゆりならした基礎の上に建つものが、まことの完成であることを信じて居たからであらう。どうか我々もその素直な信頼に、背かぬやうにしたいものと念じて居る。

太平洋戦争の起るより數年も前、山口君は好い機會を把へて、弘く南方の國土を歴訪して來た。其日の感激は深いものであつたらしく、君が生活觀照の態度にも若干の影響は看

取せられ、讀書の傾向は著しく進展した。しかもこの方面の完成は愈々末遠く、かの杳漠の果に散らばつて住む人々と、之を指導し聲援して行かうとする先進國の住民とを、均しく支配する天地間の法則が、是だと明示せられるまでにはまだよほどの年月がかゝり、たとへ我々が武内宿禰ほどの長壽を保つても、すつかり結末を見ることは六つかしいであらう。必要なるものは希望である。必ず斯うなるといふ確信の根據である。山口貞夫君は壯齡にして世を去つたけれども、永く安全な希望を我々に遺して居る。

(昭和十八年十月)

檜木範行著『日向馬關田の傳承』

昨年は春と秋と、兩度までも鹿兒島を訪れたのに、檜木氏の大人には一回は不在の爲、

一回は私の僅かな遠慮から、終に面會を求めずして還つて來た。今この書物の世に出て行くのを見るにつけて、何か寂しい心残りを感じずには居られぬのである。故人はやはり自分等が想像してゐた如く、一種新しい型に屬する傳承者であつた。明治初頭の進取時代に人となつて、まともに世の中の移り替りを見て來た人たちには、新舊二つの生活様式の兩立し難いことが、幾分か過當に印象づけられてゐる。父祖傳來の經驗に忠實な者、繼いで起るべき變遷に對して、若干の危惧を抱く者が、寧ろ一段と熱心に所謂開化の本質を捉へんとした。さういつ迄も過去の事物の咏歎に、耽つてばかりは居られぬといふ氣風が、多くの有識者を支配するやうになつた。この警戒は時として、やゝ反感に近いものとさへなつて居る。昔を尋ねられることを當世と交渉無き者と、認められたかの如く慣る人さへあつた。そんな事を聽いて何になさると、叱られたことも私は覚えてゐる。私の師事した田尻稻次郎先生などは學問を以て愛國の一大事業と認め、人生の福祉以外に研究の目的は無といふことを、確信して居られた學者であつたが、それでもなほ私等が地方の旅から戻

つて来て、前代の事物の埋もれて居たものを報告すると、耳を傾けてその話を聴きながらも、必ず最後には今はもうその様な問題を、穿鑿して居るべき時期ぢやない、といふやうな批評を加へられた。一國の要衝に立つ人々にすら、現在まだこの考へ方が幾分か痕を引いて居る。まして經濟の中樞を遠く離れて、ともすれば全體の進歩から、後に取残されてしまひはせぬかといふ、漠たる不安を抱きがちな者が、所謂舊弊を危険視して、自分とはかく愛する子孫までが、徒らに往きて返らざるものに憧憬して、現世と疎開し將來の適應性を失はんことを憂ひたのは、極めて自然なる人間の情と言ふべきである。以前一つの民族の個々の群の中に、必然的に備はつて居た故老といふ者、即ち明確なる記憶と周到なる理解力とをもつて、しかも生前に少くとも一人、頼もしい傳承者を見つけて之を語り、之を引繼いで置かなければ死ねないといふ、教育の使命を意識してゐた者が、もしも斯ういふ過渡期の通念に囚はれてゐたとすればその内部の煩悶は果してどんなであつたらうか。檜木君は幸ひにして夙に傳承の學に携はり、新たなる人生の觀方を試みんとする人であつ

た故に、學問と恩愛との二つの熱を以て、徐ろにこの一旦冷え固まつた表面を、融解することに成功したことと思はれるが、子供には到底親の死ぬことなどは豫期せられるものでない、忽ち不慮の永訣に遭遇して、今更に聴き漏した題目の數多きを歎いて居るのは親子双方に對して、まことに同情すべき悔恨と言はなければならぬ。自分は齡も故人と近く、心境も亦少なからず相似てゐる。もしも會面してこの時代の推移を語り、反動が屢々無意味なる斷絶を引起さうとした歴史を説くことが出来たならば、故人も或は今少しく意を安んじて、自ら進んで問はれない事までも、語り残して置かうとせられたかも知れない。しかし畢竟する所、學問もまた一つの縁である。機運が到來しなければどんなに奮闘して見ても、個人の力では一代の研究心を、新たな方面に向けかへることは出来ない。さうして私も又檜木君と同じに、斯んなに早急にこの大切な故老が、語らぬ人にならうとは思はなかつたのである。此經驗は利用しなければならぬ。私等の知る限りでは、學問の趣味にはたしかに遺傳がある。古い生き方や考へ方を、詳しく知つて居りたいと思ふ人の周邊を

探つて見ると、必ず血筋のどこかには、昔をよく知つて語り残したがつて居る人がある。しかもその多くは新時代に遠慮をして、鬱々として陳ぶる所無く、豊富なる我々の爲の新知識を胸に抱いたまゝで、遠く永く旅立つてしまふのである。この肉身の至情を全社會の賢明に役立たしめる爲には、少しでも早く日本民俗學の意義の、弘く民間に普遍することを希望しなければならぬと思ふ。

(昭和十二年十一月)

江馬三枝子著『飛驒の女たち』

飛驒の白川を私が見てあるいたのは、明治四十年の六月、多分あなたがまだ小學校へ入られる前でありませう。前にも武陵桃源のやうなうはさ話を、語り傳へて居た者がありま

したが、實地にこの溪谷を旅行した人の文章は、たゞ二つだけしか読んで居なかつたので、現在一向に世に知られて居ないといふこと、それだけが我々に對しての大きな誘惑で果してこの中から、新たにどういふ寶を見つけて還るのがよいかといふことも、まだ考へる力が無かつたやうに思はれるのであります。土地の人たちの方でも、何を見に来るのか何が知りたいのかを全く知らぬ風でありました。たま／＼物を尋ねてもたゞ一こと答へをするだけで、伏目にさつさと行き過ぎてしまひます。それが三十何年の後になつて、是ほど色々の考へなければならぬことを、弘く日本の女性に語り得る土地になるだらうと私でも無くても誰が想像しませう。

この御本を拜見して、しみ／＼と思ひ出すことが幾つも有ります。何よりも忘れられないことは、それは／＼寂しい旅でありました。ちやうど郭公のよく鳴く六月なかばで、村の人たちは皆山畑に登つて働いて居たのか、どの家も森閑として居りました。細い街道の曲り目の端まで、誰もあるいて居ないといふ處が何度もありました。さうして雨が折々降つ

て来たのであります。兩側の緑の山に雲がかかると、一谷はたゞ流れの音だけになり、幽かに山の藁の聲が聴えて来たりしました。

飯島で見つけた越中のポツカに荷物を引繼いで、高山の案内者は天生を越えて歸つて行き、私は一人になつてしまひました。も一度友をさそつて来て見たらどうだらうといふことを、考へずには居られませんでした。

有りとある物みな濡るゝさみだれに

飛驒の山川かちわたりせし

さういつた山あひの濁つた小流れも、せめてもの結縁として振りかへり望みつゝ私は五箇山の方へ下つて来たのであります。

それから五年七年とたつうちに、故友川口孫治郎君がよくこの邊の山をあるいて時々東京へ来ては白川の話をしました。川口氏には一冊の著述さへあります。今の木曜會の同人の橋浦君や瀬川さんが、この山村に入つたのも同じ頃であります。それでもまだあなたの

様な理解ある批評者が、親しく白川の女たちと、何度でも心を語りかはす機會などが、やがて来ようとは思つて居りませんでした。世の中の移り變つて行くといふことは、何かにつけて不安ではありますが、それが無かつたならばこの本も歡んで迎へられず、第一にあなたの日和下駄の音が、この深い谷底に響くやうなことも無かつたでせう。三十何年前には私などが、求める途すらも知らなかつたものを、もうあなたは見つけ出し、人に示さうとして居られるのであります。

前の旅の終り方には、私は伏木の港を訪れて、飛驒から流れて出る材木などを見ました。其頃の伏木はまだ静かなもので、埋立ての草原には、はたゞばかり澤山に飛んで居ましたが、年を隔てゝ再び往つて見ると、そこには見慣むほどの上屋が建ち並び、工場の煙は繁く、川は其間に力強く流れて海に注ぎ續けて居るのであります。同行の大間知山口の二君は、ゆくりなく爰で白川の話を私から聴いて、次の日は水源庄川の谷を、高山の方へ抜けて還つて来ました。山口君はこの夏なくなつてしまひ、大間知君は今新京に行つて働い

て居ますが、多分この二人は私以上の深い關心を以て、あなたが「ひだびと」に連載なされた木谷七戸の聞書を、愛讀して居たことであらうと思ひます。それで記念の爲に、私があの伏木の町の旅宿で、書いて二君に示した歌を残して置きます。年とつた者の癖です。笑つてはいけません。

我はこの射水の川のみなかみの細き流れをかつて見たりき

瀬川清子著『海女記』

この一冊の本を讀んで見て、女でなくては出来ない仕事といふものが、まだ學問の方にも色々あることに、心づく人はきつと多いであらう。同じ前代の生活事實でも、文字に書き留められ記録に残つて居るものだけは、よく讀みよく考へて覺えて居る老人が男の中

にも多いが、彼等は明治初年の最も忙しい時代に育つたので、たゞの記憶の方までは中々手がまはらず、其分は自然に女の特に慧しい者に、委ねて置く姿があつた。ところがこの人たちは遠慮深く、さうたやすくは始めての訪問者に、知つて居ることを語らうとしない。いつでも爐の火の向ふで手の甲を温めてばかり居る。殊に私たちにはちよつと尋ねることの出来ぬ問題が、女性の生活を繞つて幾つとも無く残つて居るのである。たま／＼同情を以て之を察し得たやうに思つても、男が之を傳へるとなほ心もとなく、又はいきみに聽える。女性の社會觀と人生觀、中でも男女の仲らひなどはまさしくその一つで、たとへば芝居の御姫様などは、男の注文通りに出來て居るといふやうな批評を、昔も女の人の口からよく聽くことであつた。それを参考にしないは第二の問題として、ともかくも一方の立場を省みない觀察は、眞相でないと思へると思ふ。女の學問が土佐日記の序文のやうに、男に出来るだけを目標として居る限り、斯ういふことは話にも希望にもならなかつたのである。それが今度はこの瀬川さんの實例によつて、新たに開拓の端緒を得たのみ

ならず、又大切な若干の指針を示されたといふことは、今日の御時世としては特に悦ばしい。つまり女性がその持前の長所を發揮して、國の文化に貢獻せんが爲には、是非とも先づこの人のやうに、眞剣であり又無私でなければならなかつたのである。

自分の知つて居る限り、獨りで瀬川さんのやうに、全國をあるきまはつた婦人も少ない。それが何れも珍らしい土地であり、又苦しい旅であつて、一時は健康にもどうかと危んだ位であつたが、御蔭で我々のもちつた家苞は、皆第一次の記録、即ち今まで一べんも文字の形で、此世に傳へられたことの無い事實ばかりである。有りといふことを聞いて居ただけの、至つてつまましい人々の生活が、誇りも咏歎もなしに、すなほに内側から映し出されることになつた。女にも言はうよりも女であるが故に、しようと思へば斯ういふ仕事が出来たのである。小さいかは知らぬが心強い立證であつたと思ふ。文章が明快でむだの少ないのも私たちにはうれしい。つまりは女に有りがちな餘計な辭令は取りかはさず、聽くべきことだけは皆聽いて、ちゃんと覺えて還つて來たので、よつほど物の問ひ方が上手

であつたらうことは、その答への言葉の中からも推測し得られる。練習といふことも勿論あらうが、是はやはり又態度と意氣込、更にいふならば精進の力であつたと思ふ。

たゞしこの様にも辛苦しなれば、前代女性文化の眞相は把握することが出来ぬものかと、思つてしまふのはまちがつて居る。この書の著者に向つて我々の感謝して居るのは、單に無人の野を拓き、うばらからたちを伐りあけて、青空の日影を迎へ入れたことであつて、もう世の中はずつと明るくなつて居るのである。還つて來て見れば家の中にも桓根のまはりにも、今まで心を留めずに居た色々の民間傳承が僅かなものに覆はれて埋もれ居たのだつたといふことを、瀬川さん自らが此頃になつて、心づき始めて居るのである。如何なる境涯でも心掛け一つ、我身に傳はる力を世の爲に、役立てようといふ念慮さへあれば仕事はまだ幾らでも残つて居るといふことが、言はゞあの骨折な修學旅行を縁として、追追に知れ渡らうとして居るのである。素より是も亦一つの機運であらう。現に女性叢書の次々の巻にも見られるやうに、今まで各地方に立ち別れて、靜かに常民の生活を觀察し、

それを記述して世に送らうとする人々の態度は、期せずして大よそは一致して居る。しかも一方には劍を執つて前線に立つことを得ぬ者が、どうすれば學業を以て國に盡すことが出来ようかといふ深い悩みが無く、更に他の一方には新たに友となつたさまざまの民族を理解すべく、改めて今一度、親々の歩んで来た道筋を見なほしたいといふ、切なる願ひが起つて居なかつたら、斯ういふ折角の御手本も、たゞ單なる物珍らしさの讀みものとして、やがては又忘れられてしまつたかも知れぬのである。さうはさせないのも時勢の力と言つてよからう。歴史の學問の一生面が、新たに女性の手によつて、育てはぐくまらるべき兆候は既に見えて居る。海女記は亦一つの記念の書として、恐らくは後の世に傳はるであらう。

(昭和十七年十一月)

能田多代子著『村の女性』

この一巻の文章の中では、特に農村探訪記以下の諸篇から、楽しい印象を私は受けて居る。是まで一べんも探訪といふことの、無かつた村々であるといふだけなら他にも例は多いが、年頃同情をもつ著者のやうな人が、村に生れた若い女性を道案内につれて、ちやうど野山は紅葉尾花、里は刈入れ時の活き／＼とした秋なかばに、澤を渡り、長根の路を登り降り、次々とゆかりの家々を訪れて行くといふ情景は珍らしいもので、單なる學問の道行振といふ以上に、何か新らしい文化映画でも見るやうな、意外な悦びを人に與へて居る。おまけに其中には程よいところ／＼に、逢つて話をした老人や女房たちの、素朴な思ひ入つた面ざしと物いひが、大寫しのやうにして挿し込んであるなどは、以前は言ふも及ばず

後にも恐らくはさう多くは類があるまい。曾ては斯ういふ人生の現實も片隅に有つたといふことを、しみじみと考へて見る人の爲に、是はまことに親切な贈りものであつた。失禮な話かも知れぬが、企てゝは却つてこの様には書けなかつたらう。すなほな物を感じる力といふものが、案外に大きな仕事をするといふことを、改めて私も経験したのである。

今までこの五戸といふ地方へ、足を踏入れたことの無い我々にも、是で一通りは土地に住む人の氣持が、窺はれたやうな感じがするのだが、しかし細かく見て行くと、まだ色々の註釋の欲しい點が見つかつて来る。もしくは唯すら／＼と通り過ぎてしまふものゝ中に立ちどまつて更によく見て置くべきものが、残つて居るやうななごり惜しきが多い。それで折にふれてそちこちの雜誌に、書いて置かれた同じ土地の生活誌のやうなものを、出来だけ數多く拾ひ出して、一冊の本に纏めて見てはどうかといふことを、勧めたのも實は私であつた。斯ういふわざとでない幾つかの敘述を繋ぎ合せ、自然の綜合によつて徐ろに真相に近づいて行くといふことは、讀書家にとつても楽しみな仕事であり、又最も穩當且つ

公平な判断を、導いて来る道でもあらうかと思つたからである。最近の歴史に於ては、廣い全國の中でも東北は殊に、その將來の展開に就て、多くの外部の人たちの關心を引付けて居るが、其割合には近よつて詳しく知らうとする者が少なかつた爲に、今まではとかく簡単な概念によつて、一括した推論が下されやすかつた。さういふ場合にいつも迷惑をするのは、五戸郷などのやうに比較的早く開け、しかも何等かの事情によつて、その古い頃の文化組織から、そつくり脱け出して來ることが出來ずに居る土地である。勿論さう謂つた土地も少なくなつて行く一方で、その變遷經過の究め難いことが、言はゞ近頃の東北問題六つかしいものにして居たのである。能田多代子さんの生活描寫が、單なる昔を愛する者の心ゆかしであり、又はたゞ御國自慢の一種であつたとしても、なほその數々の言葉の下に、隠れて流るゝものを掴み味はつて見なければならぬ。ましてこの人は久しく民間傳承の會に携はつて、既に我々の知識の渴きを知つて居る。是が東北の理解の上に、新たに若干のものを寄與することは、素よりその志であり、さうして又目的はほゞ達して居る

やうにも思ふ。

しかし自分にも経験のあることだが、書物の實際の効果といふものは、書いて居る常人には豫測し得られるもので無い。寧ろ後々の良い讀者によつて、時過ぎてから新たに發見せられるものが、幾つか残つて居る位なのをいふはせとしなければならぬ。この本の中にももう少し説明のあつてよい處、或は五戸といふ郷土の特色がやゝ知られて居たならば、更に一段と興味が深かつたらうと、思はれるふしも無いとは言へぬが、そんなことに氣をもんでうっかりと口を出すと、却つて提灯持ちの嫌ひがあつて、何か新しいものを此中から見つけ出さうとする熱心を、殺ぐこととなつてもつまらない。それよりも將來この女性叢書のやうな事業に参加して、一つの方面を分擔して見ようといふ志のある人たちに、少しは役に立ちさうな二三の心付きを、聊か無遠慮に書添へて置いた方がよいかと思ふ。その一つとしては女の修養といふこと、是はやつぱり少女の頃から、おとなに成つて行くまでの間に身に附いたものが、深く力強く生涯を指導して行くやうに、最初から定まつて

居るのでは無いかといふことが感じられる。能田さんは國でも決して古い型の女性で無くそれから東京に出て来てさまざまの世相を學んだ上に、更に九州の一角に移り住んで、最も思ひ出の深い結婚生活を送つて居られた。主人はすぐれた民俗學の學徒であつて、あらゆる生活の觀察をするのに誰よりも自由な境遇に居つた人である。しかも奥州五戸郷の生活を説く段になると、私たちが期待して居たやうな南北の比較が、まだちつとでも試みられては居ないのである。恐らくは此次に肥後の玉名郡の見聞記を書かうとする場合に、それが想像以上に豊富に出て來るのかも知れぬが、ともかくも婦人としては至つて得難い經歷、國の兩端の、しかも農民の常の日の生活を熟知して居るといふ特長を、ここでは十分に利用することが出来なかつたのは、必ずしも同情の深さ淺さにはよらず、寧ろ常識とも名づけらるべき體驗の濃さ淡さ、もしくは成長の盛りの日の印象といふものが、たとへば入墨などの如く、身になり肉になつてしまつた結果であらう。教育者に聞かせるとは是は大きな參考になるが、そんなことまでは我々の掛りで無い。それよりも日本の昔の心を探ね

て行くのに、この點を各自の足場とし、従つて又やたらにめい／＼の常識に照して、異なる境遇に養はれた者の心持ちを、批判しようとする傾きを、戒めなければならぬことだけは考へられるのである。

さうすると話は結局、どういふ人に向つてするつもりで書くのが、一ばん効果があるかといふことが第二段の問題になつて来る。この本には限らず、女の人の書かれるものにはいつも其悩みが窺はれ、女で無けれども自分なども始終苦しんで居る。理窟は勝手なものだから、一人も聴く人が無いと思つてもしやべれるが、一たび見た感じたといふ事實を語る段になると、是には立聴き傍聴といふ様な、知らぬ聴手までが豫想せられるのである。この能田さんの筆の跡にも、處々に書きにくかつたらうと思はれる部分が見られるのは、私には無理も無いと同感せられる。一方には殆ど何も知つて居ない奥州以外の讀者があつて、さういふ人にもうんと聴かせたし、他の一方には故郷の知人の、そんな當り前なことをと思つて居るのが、背後には又多く控へて居るのである。是をどうしたら双方共に、讀

でほゝ笑むやうな楽しい満足を與へられようかといふことは、言はず語らずの間に誰でも迷うて居る。後來も必ず問題になるだらうが、是は私などは自分に聴かせて居るやうに、もしくは愛する人々が眼の前に居て耳を傾けて居るやうに、空想を描いて語るより他は無いつて居る。昔の家刀自の膝の傍に寄つて來た者は、知らぬやうに見えてもまだ色々な事を知つて居た。従つて話は簡單でもよく、又寧ろ短く強い言葉で、要約してやつた方が効果が多かつたのである。是に反して現在の知るべき人々は、大抵は成長期の境遇を異にし、斯んな事すら知らなかつたのかと、驚くやうな場合が多い。ましてや其愛情を更に推し擴げて、百年二百年の後代に及ぼすことを考へると、冗長は無論いけないが、少なくともさきで判るまいと思ふことを書き残すべきで無い。背後の少數の書かれて居る人たちの思はくなどは、斯ういふ意味に於てなだめて置けばよい。即ち彼等も亦我々の筆を通して、始めて後世に向つて語ることが出来るのである。

それから今一つ、是まで自分が知り抜いて居ると思ふことでも、改めて人に語らうとす

ると、又新たな疑問の種になることが屢々ある。私たちはそれを事實と學問との繋ぎと考へて、出来る限り粗末にせぬやうにして居るが、馴れないうちは是が氣になつて、思ふやうに話を進められなかつた經驗を持つて居る。この世に理由の無いこと存在しよう筈は無いのだが、それがまだ明かになつて居ない場合は至つて多い。どうしてさういふ事實が有るだらうかといふ疑ひは、言葉通りに受取つてこちら共々に、考へて見るべきものであるが、女の人たちにはそれを有り得ないことだ、又は何かのまちがひであらうと、言はれたのと同じに取つて氣にかける人が折々はあり、私などもよほど受答へに用心をして居る。能田さんはもう馴れて居るので、決してさういふことには頓着はしないが、それでも時々は事實の前に立留まつて、果して説明が無くても人が之を信するだらうかと、自問自答するだけの心づかひだけは持つて居られる。さういふ場合に時々私の名を引いて、柳田も斯う謂つて居るからと、御手本に喚ばれて居るのは迷惑な話であつた。私は前にも述べた通り、まだ五戸郷には足を入れたことが無く、今まで他の方面の僅かな見聞に擔つ

て、斯ういふわけでは無いかと推定して居ることが、ひつくり返りはせぬかとびく／＼として居る者である。爰の又一つの新しい事實が、この推定を支へてくれれば仕合せといふまで、それを解説する力などは持つて居る筈が無いのである。だから此點は斯ういふわけかも知れぬと、謂つて居る人が有るといふ程度に、引下げて讀んで貰はぬと甚だ困るのである。しかしさう謂つて居るうちにも追々と探訪が進み、殊に東北のあちこちの土地から、斯ういふ精密な且つ同情に富んだ記載が、更に三つも五つも出て來ることになつてそれが偶然で無い數々の一致を示すやうになつたら、そんなつまらぬ苦勞はする必要も無くなつて來るにちがひない。どうかさういふ證據を安々と利用して、村々の女性の隠れた功績が、誰にでも考へられるやうになつて後、改めてもう一度、この先發者の御手本に禮をいふ時代が、早く到來せんことを私も切に念じて居る。

(昭和十八年四月)

大藤ゆき著『兒やらひ』

四鳥の別れ

序文はもう書かぬ事にきめましたから、たゞ心に浮んだことを言つて見ます。少年の頃近松だつたか馬琴だつたかを讀んで居て、四鳥の別れといふのは何の事ですかと、父に尋ねて見たことがあります。父の話には、それは孔子家語といふ本に、かつて孔子が衛の國に居られた時、人の泣く聲の甚だ哀しきを聽いて、顔回を顧みてあれは生離をする者の聲である。昔桓山の鳥四子を生む。羽翼既に成つて將に四つの海に分れんとす。其母悲鳴して之を送る。その往いて返らざるが爲なり。竊かに音の類するを以て之を知ると言はれたとあるのに、據つたものだといふことでありました。父が亡くなつて十年もしてから後

に、文部省の展覽會でこの四鳥の別れを、大きな繪に描いたのを觀たことがあります。崖に臨んだ喬木の梢から、二羽の大鷲が四つの雛の飛んで行くのをながめて居るところを、心を籠めて寫し出したのを見まして、この畫家も亦人の親だなと、しみぐと感じたことでありました。

近ごろ翻譯せられたバイコフの『森の王』の中にも、たしか虎のお母さんが、仔虎の食物に夢中になつて居る隙を見て、そつと往つてしまふことが書いてありましたが、日本でも熊は仔熊を三歳までは連れあるくことがあつて、四歳の春の雪解けに穴を出るとき、その子と別れることになつて居ます。その方法は北滿の虎よりも素朴で、大抵はこはい顔をして咬むのださうであります。越後から會津にかけての山地ではそれをヤラヒと謂ひ、さうして母と別れた子をヤンゴ又はヤラヒゴといふことは、私と倉田君とで集めた分類山村語彙にも出て居ります。それとこの本の『兒やらひ』とが、別の言葉で無いといふだけは、著者としても認めて居られることと思ひます。

ヤラフは神代卷の素盞鳴尊の條にも見えて、日本では最も古い言葉の一つであります。それが「遣る」といふ動詞の第二形で、行爲の持續を意味して居たことは、前代の語學者も認めて居るに拘らず、どういふ理由からか文獻の上では、鬼やらひとか儼やらひとか、妙に好ましくないものを追ひ立てる場合にしか使はれて居らず、たま／＼中國と四國との片隅だけに、子やらひと又は孫やらひとといふ言葉が、方言として僅かに傳はつて居たのであります。以前我々平民の口語の中に、是が全國普通のものであつたか否か、大きな且つ意義のある問題とならずには居りません。といふわけは、ヤラヒは少なくとも後から追ひ立て又突き出すことでありまして、ちやうど今日の教育といふものゝ、前に立つて引張つて行かうとするのとは、まるで正反對の方法であつたと思はれるからであります。人を人並にして人生へ送り出す期限は、もとは御承知の通り思ひ切つて早いものでした。男も娘の子も十五になると、もうそれ／＼の群に加はつて、仲間どうしの切磋琢磨をしたことは話に残つて居るだけで無く、今もまだ續いて居る土地も少なくはありません。當世のお母

様は眼を圓くしてしまふでせうが、人を成人にする大切な知識の中には、家では與へることの出来ぬものが實は幾つもありました。さういふ點については世間が教育し、又本人が自分の責任で修養したのであります。ヤラフといふのは何か苛酷のやうにも聞えますが、どこかに區切りをつけぬと、いつまでも一人立ちが出来ぬのみならず、親より倍優りな者を作り上げることも出来なかつたのであります。それも世の中がたゞ少しづつ、氷河のやうに移つて行く場合ならば、大體に親の經驗を相續し、親の歩んだ足跡を踏んで居ても、同じ結果になつたかも知れませんが、是からはもうさうは参りません。子供には別に彼等の時代があり、又彼等の活き抜かねばならぬ人生があつて、それは屢々我々の想像を超越したものであり得るのであります。丈夫な逞ましい、人にもたれかゝらうとせぬ若者を、育てゝ送り出すことは國の爲であり、同時に又彼等の安全なる道でもあります。さうして又これが古くからの約束では無かつたかと思ひます。鷲だの熊だのゝ眞似をするのでは萬萬ありません。彼等には自分の勝手もあり、又別離の強い悲みも忘れてしまふらしいに反

して、人は兒やらひの爲にみな裏れてしまひますが、その代りには恩愛のきつなは永く絶えません。たゞそれと次の代の新鮮なる生活計畫とを、一緒にしてしまふことを避けさへすればよいのであります。私のやうに年をとつてしまつた者で無いと、今日の孝道には色色の流弊があるといふことを、注意することは出来ぬのであります。

あなた方は『兒やらひ』などいふ本を書きながら、果して或時が來たらヤラフことが出来ると思ひますか。出来なくとも私はちつとも恠しみません。それにしても是だけの古今の差、もしくは公社會に對する親の役目の、右と左との考へ方の差があることを、似たる境涯の人たちに心付かせることまでは出来るから、結構だと思ひます。未來永々の子や孫たちに向つて、この本が大きな記念の書であることは申すに及ばず、更に輝かしく展開する聖代の文運に、日本民俗學といふ學問を繋ぎ付ける爲にも、『兒やらひ』といふ標題は殊に適切でありました。以前はどういふ風にして居たらうか。といふ疑問を抱くことを、今日のお母様は怠つて居るやうに見えます。未來を愛するといふ心持が、新たにこの本に

よつて湧き起ることは、たゞ單なる復古ではありません。特に今日の國情が之を要求して居ります。

(昭和十九年五月)

女性民俗學研究會編『女の本』

女の本、と題してもよい様な本を、何とかして今一冊は残したいといふ念願を、久しい以前から私は抱いて居た。さういふ餘計な御世話を、もう焼くには及ばぬと知つたことが、この書物を世に送るに當つての、まづ大きな一つの悦びである。

學問に心ざす今日の女性には、二つ二通りの態度が今でもなほ見られる。その一つは男に負けるものか、男に出来ることなら何だつて女にも出来る。差別を立てるのがそもく

悪いといふ氣持、是はけなげなことだが永く續かぬ勇氣で、實際はたゞ男の中の、やゝ平凡な者だけに勝つて満足して居る。

第二のものは女の特長を活かしたいといふ志望、女でなくては出来ない仕事、又女が携はれば今一段と進むにちがひない研究を、選み出してそれへ力を入れようとするもの、歴史などはもし女の感覺を頼むことにしたら、是からさきどの位多くの新しいことが判つて來るか知れない。是まではとかく猿蟹合戦の猿のやうに、へただの種だのばかりを女に分けてやる形があつた故に、つまらながつてよく働かうとしなかつたのである。

其分業を改めるやうにするのには、今日は誠に好い機會である。私はもう大戦の初頭から、特に女性に適した學問がある筈といふことを、男の癖にと言はれさうなほど力説して居た。さうして最も深くけだかい精神的分野でも、曾て尋常の婦人までが、大いに働いて居た事蹟の有ることを、『妹の力』などに於て證明しようと思つたのであつた。

しかし昔はどうであらうとも、今はもう變化し切つて居るのかも知れない。新たに優れ

た女性の寄與し得べき事業が、この方面に在るといふことを一般に認めさせる爲には、やはり改めてその證據を示さなければならぬ。この一卷の合著に携はつて居る人々は、修養素質二つながら、たしかにそれを爲し得る人だと私は信するが、女は總體に藝度胸といふやうなものが足りない。果してこの第一回の試みから、その能力を十分に發揮して居るかどうか。それだけを少し私は氣づかつて居る。しかし現代の多數讀者の中には、年を取つた男子の私などよりは、もつと敏感にこの本の言はうとして居ることを理解して、共に同じ方向を目ざして、もつと前進しようとする人がきつと有る。それが我々の楽しい豫想であり、同時に筆者たちの第一次の目的でもあると思ふ。

(昭和二十一年六月)

高田十郎著『隨筆民話』

一

高田君の文章は、大正五六年以來、見かけると必ず読み、讀めば必ずしまひまで、讀み通さずには置かぬといふ、習癖のやうなものを、私は持つて居る。今度の本は殊に自分の勧誘がもとで、世に出ることになつたかとも感じられるので、出るのが待ち切れなくて、原稿ですつかり拜見した。譽められることは第一に著者が嫌ひのやうであり、この序文の筆者も格別すきの方ではなく、それよりも是から愛讀しようといふ人たちに干渉がましくて失禮だから、是は先づさし控へることとし、茲にはたゞ之を話題とした世間話のやうなものを二つ三つ並べて、この本を將來の學界と結び付け、かつは年久しい我々の交遊を記

念しようと思ふ。

二

多くの友人がもう知つて居るであらうことは、高田君は名代の筆豆であつて、しかも發表欲の少しく淡い人である。奈良を第二の故郷としてから三十何年、「奈良雜筆」といふものを書き續けて居るのは有名な話で、昨今はもう三百巻も越して居るさうなのに、何かの言つて一向に弘く見せてくれようもしない。もう十七八年前の事に、それを色々と勸めて、やつと一冊だけ、其中から選み出したものを本にする約束をしてもらつて、大急ぎで「爐邊叢書」の近刊と豫告したのだつたが、雙方支度がひまどつて居るうちに、惜しくもふいになつてしまつた。今回出る本は、定めて新たなる思ひ立ちであらうが、あの昔の約束の氣がかりが幾分か背をつゝいて居らぬとも限らぬのである。

三

全體、高田君自らがまだ心づいて居られぬらしいが、日本で隨筆といふ本は千近くも既に出て居るに拘らず、目で視・耳で聽いた話を其まゝ書き留めて居るものは存外に少なく大抵は一べん學問の吹革にかゝつて居る。もつとはつきり言ふと、採録者がえらい人であるが爲に讀まれて居る。純なる客觀の記述といふものは、日記や紀行の中から探し出すよりも、まだ探し出しにくいのである。私の今覺えて居るのは、津村正恭の「譚海」などがその希有な例の一であつた。近年になつては山中共古翁の「共古日録」、是が分量に於ても「奈良雜筆」に近いものであつたが、翁の歿後誰か私蔵してしまつて、ちつとも世の中に役には立つて居らぬ。勿論どのやうに筆豆であらうとも、一人の力ではさう大きな事は出来ぬかも知れない。私の目的は寧ろ斯ふいふ流儀が、決して物好きや道樂でないことを例示して、後を嗣ぐ人の數を多くしたかつたのである。

四

民話といふ言葉は、氣の利いた名だと私も思つて居る。曾ては佐々木喜善君の「江刺郡昔話」などでも、さういふ一項を設けて、或種の説話だけを其中に排列したことがある。ただ自分たちの仲間には、昔話が西洋で民間説話と呼ばれ、それを省略して民譚とも民話とも譯して居る習慣を知つて居る故に、今以て其採用をためらうて居るのである。それで現在は假に世間話といふ名を以て、この高田君の謂ふ民話に宛てゝ居るのであるが、固より評定の餘地はあり、是に限るとまで思つて居るわけではない。「世間話」は世間でもよく使はれる言葉で、人によつて心持もやゝ變り、第一に我々の最も重きを置く「民衆の間に行はるゝもの」といふ意味が、省みられない懸念もあるのである。しかし今のところでは、ともかくもまだ一定しては居らず、従つて民話の範圍と限界、殊にその文化史上の意義といふものは定まつて居ない。我々の待ち焦がれて居る永遠の平和が、幸ひにして

確立した曉、ふりかへつて今日の受難時代を仔細に考察し且つ咏歎するやうな世の中になつたならば、或はこの高田君の一著などは、その外形の花々しくないに似もやらず、最初の民話の集録として、可なり大きな歴史的意義をもち、意外な珍本として捜し求められるといふやうな、奇しき運命を膺はぬとも限らない。

五

さう思つてもよい理由は、私には簡単に説明することが出来る。今次の大戦役が、國運の大變化を促したと同様に、民話もしくは世間話といふ一種の説話の上にも、是は亦過去に比類を見ぬほどの、大いなる展開の機會であつた。我子我夫を戦場に送り出した者は言ふに及ばず、それに連なる家々までが、鋭敏に朝夕聴耳を立て、居る世間の話といふものが、事實は大半は此中に算へらるべきものであるだけでなく、海の外には又恐らくは何十倍、或は何百倍もの同じ類の話が、語りかはされ又散らばつて行つて居るのである。北は

アレウトの雪氷の島籠り、南はソロモンの果無し林の片蔭、それを繋いだ雲山萬里の間に、數限りも無い日本の若い人たちの、各々生れ故郷と經歷を異にしたものが、寄り合つて夜營をして居る。身うち友垣の音信は稀であり、張りつめた晝間の心持も、時あつて轉回の必要を見ることがある。爰で毎晩の話の種になつて居るものは、恐らくは銃後の村里とも又別であつて、必ずしも戦鬪の壯烈な場面ばかりではあるまい。勇士もその寂寞無事の日には、やはりこの高田君の本に並べてあるやうな、素朴單純で且つ變つて居る話寧ろ日々の生活とは懸け離れた題目を提供することによつて、人を怡ばしめ又自ら樂しまうとする場合が屢々有るであらうと察せられる。さうして又其日の印象は、大なり小なり形を留めずには過ぎ去つてしまはぬことと思ふ。

六

昔も人間の話好きもしくは話上手と言はれるものは、是とやゝ似たる境遇に在つて、

段と養成せられて来たのでは無かつたかと思ふ。同じ一つの郷土に成長し、朝晩の見聞を共にする人々の間では、話して聽かせるといふ必要が起らぬのだから、當然に無口にならざるを得ない。たま／＼我獨り知つて居るといふ話があつても、數が乏しい故に忽ち一つ話となり、又あれかと言はれては閉口する。それを避けんが爲に人の噂や蔭口、又は何でもないことを事々しく、いつ迄も話して居ることが流行して居たが、もう是からは、さういふ心細い必要が無くなるのである。戦争が國民の話題を豊富にするものであることは、小規模ながらも日清役以來、既に經驗せられて居る。是まで豫想もしなかつた異國情調といふものが、最初の刺戟であつたことは認められるが、しかも若干の歳月を経て振り回つて見ると、その主要なものは記録になり又常識になり、ほらや作りごとは皆消されてしまつて、後に残るはたゞ話を聽くことの興味と、何か變つた珍らしいものが、もつと／＼世間には有る筈といふ期待、つまりは我々の民話と名づけ、又は世間話と呼ばうとするもの、段々と複雑且つ重要になつて行く傾向だけである。文字が國民の口を以て傳へんとす

るものを、片つ端から無用にして行くといふ推定が、誤つて居たことも追々とわかつて來る。今度のやうに文士がよく働き、如何なる一隅の小さな出來事でも書いて残さすには止まぬといふ意氣込の、發露して居る戦役は未だ曾て無かつたが、しかも其中には今までの日本人が、「話」と思つて居るものゝ大多數は入つて居ないのである。ちやうど名士の詳しい傳記が世に出ると、却つて色々の逸話が後から發見せられて來るやうに、話には又記録に對するとは別の要求があつたのである。たとへばどの様に短くとも、それ自身一つ一の纏まりがあつて、長い物語の一節とはちがふこと、即ちどこかにそいつは面白いとか、又はそんな事も有るかといふやうな中心の尖つた點があつて、それを目標に聽いた人も記憶して行かうとする。是が大昔以來の話といふものゝ要件であつて、今も其形のまゝで、恐らく前線にも又は内地にも、急激に流布して居るのである。

素より其中にはまぢがひやこしらへごと、話者が一番さきに忘れてしまひさうなもの、或は下品でいはゆる御話にならぬものも、數多くまじつては居るだらう。さうで無くとも

次の大きな感動の爲に、拭ふが如く記憶から消え去り、又は聴手の能力境遇もあつて、そつくり其まゝを故郷に持還り、何ぞの折まで藏つて置くといふものが、百に一つも無いだらうことはわかつて居る。しかし少なくとも、話が常に珍らしく、たとえば少年が始めて爺婆の昔話を聞いたやうに、之によつて夜を忘れ又一生の無聊を驅逐するほどの、明るい快活な力をもつことは體驗せられたのである。そのみならず是が一たび意識の底に沈潜して、いつかは又再び空想の色模様の中に織り込まれ、人の文藝を花やかに又潤ひの多いものにするであらうことも考へられぬことは無い。さういふ實驗は是からならば企てられるのである。

七

高田君の一著を精讀して、私の心付いたことも二つや三つではないのだが、それを説き立て、居ると愈々序文のやうでなくなる。何にもせよ是くらい簡明率直で、話者も知つて

居るだけを皆語り、聴手も聞いたこと以外には一言も加へぬといふ記録であつても、なほ其間には國の文化の伏流の、遠く久しいものが掬み上げられるので、是に參與して居るものがまだ澤山に、背後に控へて居ることが感じられるのである。以前國內の不完全な交通状態に於ても、世間話は存外に遠い旅行をするものであつたことは、幾つとない證據が擧げられて居る。ましてやこの絶大の新機會に際して、一度は萬里の海の外をあるきまはつたものが、多少の變質を経、又は自然の加工を受けて、再び日本の、しかも出た處とは異なる故郷へ、續々と戻つて來るといふことは、たとへ私達の想像するやうな莫大な數でなかつたにしても、なほ斯邦の説話世界の、大きな變貌をもたらすであらうことは疑はれぬので、私などはもうそれを楽しみ味はうことも出来ないであらうが、心竊かに將來の明朗なる新天地を想望し、且つ祝福せざるを得ないのである。

高田君の隨筆民話は、ちやうどこの大きな境界線の縁に立つ記録として、後世人の目からは大切に視られるにきまつて居る。殊に偶然では無いのかも知らぬが、奈良の最近の三

十年が、主たる舞臺であるといふことも意義が深い。近い頃までまだ丁髷が何人か居たと書いてあるのを見ても判るやうに、こゝは色々の生活様式が、比較的抵觸せず併立し得られる土地であり、又は静かなインテリが、黙々として世の中の推移を、眺めて居られる高みでもあつた。原因は多分諸國の人間が、入込んで雜居し得られたことであらう。國の文化の烈しい變遷を、代表して居るとまでは言ふことが出来まいが、少なくともその組織の一端の、少しほぐれたところを見せて居るやうな感じはある。随つてこの本は「多聞院日記」を讀んで私たちの抱くやうな興味を、三百年までは待たずとも、百年後の人にでも與へるにきまつて居る。だから是から出し惜みなどはせず、もつとどしどしと是と似たやうな本を、次々公けにしてくれられると思ふのだが、それには中間に出版業者、又はさまざまの統制機關があつて、著者よりも寧ろ讀者が力である。譽めないとは言つて置いたが、やはり少々の提灯持を、せずには居られない正直な理由が茲に在る。

八

そこで終りにごく遠慮がちに、此本の長處殊に私などの悦んで居る點を挙げると、第一には文體である。斯ういふすなほな飾りのない文章でないと、自分の感じたまゝを人に傳へることは出来ない。現に私などは毎度よそ行きの文句で苦しんで居る。高田君ばかりは文章と書翰と談話、この三つのものが互ひに相近く、後日になつてその何れによつて教へられたのであつたかを、憶ひ出せないやうな場合が私には多い。それだから又口や手紙以上、何でも細々と書いて置くことが出来たので、或はたゞ單なる辯、持前のやうなものだつたかも知れぬが、それにしたところで世を益することは一つである。私は現代の國語活用のさまざまな束縛、殊に記述の文章の窮屈さを歎するたび毎に、ちやうど好い人に好い持前の具はつて居たことを感謝せずには居られぬのである。

第二に悦ぶことは、幾分か私事に近いが、高田君の感受性の鋭く且つ汎くて、何だか前

以て自分等の聽いて有難がることを知り抜いて搜して居られたやうに感じられることである。さういふ氣遣ひは無いのだがと、いさゝか私は不審にさへ思つて居る。高田氏の専門は第一には歴史考古學、其他も趣味が多いから、少しづつは四隣へ進出して居られるが、私達の仲間のうき身を窺して居る民間傳承、殊に凡俗階級や迷信俗信に至つては、どちらかといふとやゝ理解が足らず、とかく白眼で視て居られるかの嫌ひがあつた。それが此本の中にだけは、一つ柳田に聽かせて眼を圓くさせてやれと、思つて載せられたかとも推せられるやうな世間話が、一つならすまじつて居るのである。たとへばタ、リ田と謂つて、作り主に災ひすと怖れられる田地が、奈良の郊外にもちやんとあつたこと、奈良だから殊に我々には意味が深い。或はフク子と稱して白癡者の生れることを、家繁昌の瑞相と見る風習、是も大阪には二三の例のあつたことを聽いて居るが、どこから運んで來たものか、神戸のやうな新開の市に有るといふことは、特別の事情が考へられる。少なくとも單なる古い情性の名残とは言ひ得ず、我々の語でいふとまだ生きて居るのだから、是からの實驗

も可能なのである。

次にもう一つ、是は久しく我々の間で騒いで居るので、或は薄々は耳に入つて居るのかも思ふが、今まで東日本の一隅だけに、ちよいと有ると言はれた男のツハリ、即ち女房に母となる兆候が見え始めると、忽ち亭主の方がぶら／＼病ひになつてしまふといふ妙な實例で、勿論アジアの諸民族中にも見られる擬婉といふものゝ同系とは察しられるが、こちらの主として産前の變兆であり、向ふのは兒が生れてから父が寢るのである。事によると兩々相照らして、今日なほ神祕の如く見られて居ることの心理現象が、そつくり解釋し得られる端緒にもなりさうである。それが關西のよく開けて居る都市に、此頃まであつたといふのは重要なことで、大袈裟なことを言ふならば、一つ奈良に向つて探検隊でも出して見たい氣持である。考古學の發見とは事かはり、民俗學の資料は孤立しない。一つ見付かつたといふことは松茸などの如く、もつと附近を捜せといふ忠告にもなるので斯ういふ親切は私たちの爲といふわけではあるまい。本來この種の人生の事實にも、決し

て冷々たる人ではないのだけれども、それ迄は手を伸べずに居らうと自ら制して居られたのか、さうで無ければ大よそ將來の人文科學に於て、必ず日本人が率先して解明の任に當らなければならぬ課題が、何と何とであるかを見究めるだけの、鑑別力を具へて居られるのか、二つの何れであつても我々は御禮を述べずには居られぬ。

其上に弘く我邦の民話又は世間話の爲に、國の中央部に於ける最近の發展狀態を、最もわかり易く實例を以て示されたのが此書である。著者は或は不承知であらうとも、なほ我は之をこの記念すべき大御代の、民俗學文獻の主要なる一つに算へ込まずには居られぬのである。

(昭和十八年一月十八日)

別所梅之助著『地を拓く』

別所さんの著述を愛讀して、大きな感動を受けて居た者が、以前は私などの仲間にも幾人かあつたのだが、みんな年をとり離散してしまつて、もう大分久しい間、集まつて先生の文章を談り合ふ折が無くなつてゐる。人と表現との奥深い繋がり、技術としては説くことの出来ない心の持ち方といふやうなものに就て、實地に我々の教へられて居ることは數多く、單なる懷舊の情としても、それを今一度絞べて見たいのだが、さういふことをすれば迷惑せられるにきまつて居る。故に今はただこの一卷の書の、新たに世に出るのを待ちかねて居た者が、茲にも一人あるといふことを告知するだけに止めようと思ふ。

別所さんの以前の文集は、多くは絶版になつて年久しいから、合せて讀んだといふ人も

少なからうが、外貌に於てちよつと珍らしい一つの特徴を具へて居る。それは幾つかの異なる題目が、多分は發表の時の順序に、一卷の中に排列せられてゐて、中心といふべきものゝ無い場合が多いことである。聖書民俗考の如き纏まつた研究は別として、其他は主題は掲げてあつても、之に由つて内容を測定し、刊行の意圖を察知し難いのを常としてゐる。是は日々の覺書の、單なる保存といふやうな謙遜な心持ちからでもあらうが、其爲に知れば喜ぶべき人々の、まだ心付かずに過ぎて居るものが多いのである。勿論すべての文章が敬虔なる信者生活の中から産れたものといふ點では統一して居るのであるが、さういふうちに却つて我々のやうな信仰圏外に生息する者に、先づ大きな感化を與へるやうな文章が、幾らとも無く含まれて居たのである。

後日の研究者の爲にごく大體を説いて置くが、その第一には同情に充ちたる自然の觀察是にも小さな庭上の草の花に佇立したといふやうな身近な記事から、遠く溯つて深山幽谷の、雲霧の間を踏破した記録まで、何れも孤獨の體驗である故に、今の登山群には見られ

ぬやうな内省を以つて充ちて居る。第二には日本の文藝を、楽しく彩どつて居る色々の言葉、是にも先生は今後の利用を有効ならしめようとして、先づ古人の心の緒に響いたものを尋ねんとして居られる。別所さんの古文學の味ひ方には、傳へなければならぬ異色があるのである。第三の更に重要な題目は、先生は都府に生れ、都府に半生を送つた人なるにも拘らず、土に營む者の幽かなる生活に、無限の親しみを寄せて居られる。そうして是にも亦彼等の一憂一喜の水源として、會て身の力を傾けて同胞の爲に働いた人たちの事業を詳らかにせんとして居られるのである。今日の日本國民を作り上げた、最も大いなる力の一つとして、此頃漸う省みられるやうになつて來た近世の歴史の中でも、この部分は殊に史料が偏し易い。どれだけ多くの將に埋没しようとして居たものが、別所さんの勞苦によつて顯れて來たかといふことは、今度の一卷を讀む者のほど想像し得ることであると思ふ。それ故に假に此等數種の題目が、たゞの道樂の餘業であつたにしても、なほ我々は學者の移り氣といふものに、感謝しなければならぬ理由をもつて居るのだが、別所さんの場合

は明かにそれではなかつた。ちようど先生が信仰の清らかな悦びの中に浸りつゝも、常に思をその由つて來たる所、永い世代に互つて之をばぐくんで來た人間の文化に致されたのと同じやうに、自然藝術生産のどの方面に於ても、必ず眼前の問題を其の背後に消え隠れようとするものと共に、根ごと土ながら之を我々の智慧の苑に、移し栽ゑんとせられる態度には變りはなかつた。乃ちその一貫した研究の方法によつて、學問を一つの大いなる完成へ、綜合して行かうといふ志は窺はれるのである。しかし現世の指導者としては、この様式はやはり損ではないかと私などは感じて居た。舊知門下の限りある人々に、眞摯なる學者の生涯を思慕せしめ、殊にその事業の微妙なる調和を味はしめるには、之にまさる記念物は無いのであるが、いつの世になつても人よりは仕事が後に残る。さうして一般の讀書子は我儘至極な者で、たゞめいゝの好む道から、進んで行くことを當り前のやうに心得て居る。彼等の選擇は許容しなければならぬのである。一昨年の初め「朝のおもひ」の一卷が世に出た際に、私は人に向つて斯ういふ話をしたことがある。別所さんの文集には

もう何としても手に入らぬものが幾つも出來て居る。今度はあれを皆問題別の選集にして、成るだけ多くの人に讀ませたいものだと言つたのである。ところが幸ひなことに、先生にもちようど其考へが動いて、土を拓いた人たちの話ならば、一つに纏めて出して見てもよいと言はれたさうで、私は其實現の日を今か今かと待つて居たのである。このたびの大事變に伴なうて、日本は再び又新しい國にならうとして居る。未開と名づけてもよい宏大な土地が、新たに我々の行く手に延び擴がつて來た。心ある若い愛國者が、斯ういふ書物を読んで靜かに考へて見るべき時が、折もよく廻り合せて來たのである。此本の弘く行はれることは疑ひが無いのみならず、私などの經驗によれば、更に第二第三の選集に對する渴望を誘ひ、多數の我々のやうな愛讀者を作らずには已まぬだらうと思ふ。さうした曉には又再び最初の形を以て、別に以前の文集の一つ一つを覆刻して、別所先生の本來の態度を明かにすることも不可能では無いと思つて居る。

(昭和十七年九月)

福原信三編『武藏野風物』

この寫眞帳の中で、殊に自分などのなつかしいと思ふのは、近年目ざましい變化を遂げた大川とその支流の水筋に、今もまだところどころ、昔の小さな破片が落ちこぼれて居たことである。私は書生の頃、當時下總に住んで居た二親に逢ひに、毎度學校の休みには此あたりを往來した。濱街道の方を行くと家までは十二里弱、汽車も乗合バスも全く無い時代だから、袴に草鞋がけで未明に本郷の下宿を立ち、又は夜に入つてからこちらへ還つて來た。それでこの特色の多い東葛飾の農村の、朝や夕方の光景をよく記憶して居るのである。今日はもはやその昔の片影も残るまいと思つて居ると、稀にはまだ敏感なる技術家に見出されて後の世に傳へられるやうな、しほらしい場面もあつたといふことを知つたので

ある。私の今住んで居る西南郊外の丘陵地などは、ちやうど同じ大きな變化がまさに始まつて、すばらしい勢でそれが進行してゐる。一週に一度ぐらゐは必ずこの間をあるきまはつて居るので、却つて以前とのちがひに心づくことが少ないが、靜かに考へて見ると、今あるいて居るのは皆新道で、それが兩側の石垣生垣と共に、僅かな歲月のうちに尤もらしく落つてしまひ、一方にはそれと併行する様子の並木の細路が、段々に崩れてたゞの畔みたやうにならうとして居る。林が茂つて居たうちは必要であつた多くの路しるべの石塔も拓かれて畠となつて見とほしがきくやうになれば、もはや不用だから知らぬ間に片付けられる。それよりも大きな變化は日本國中、ただこの武藏野の一角にしか無からうと思つた四谷丸太の滅法に背の高い杉林、飯炊く竈の煙がかゝらぬと育たぬなど、謂つて、必ず人家の片脇にあるものときまつて居て、よそには見られぬやうな樹色と空線とを以て、散歩者の楽しい目標となつて居た細い杉の木密林、あれなどもいつの間にか、もう工場の煙突の數よりも少なくならうとして居る。朝晩眼に馴れ氣にも留めずに居るものが、黙つて

この様な有爲轉變を重ね、今となつては却つて我々をびつくりさせるのである。

大震災の直後に世に公にした「郷土會記録」といふ本を出して見ると、あの中には那須博士の書かれた「代々木の今昔」、有馬伯爵の「汐入村の變遷」などがあつて、共に其頃から又十年ほど前の大きな變り方を説いて居られるのだが、それが出版の際にはもう又遠い過去の事實となつてしまつたことを、筆者自らが誰よりも深く感動して居られる。ところがこの兩地の現在の姿は又どうであるか。代々木は帝都の最もよく整うた一區劃となつたが、それでもまだ歩いて見ると爰があれ、是が何の跡といふことは出来る。汐入の靜かな川沿ひの村に至つては、たま／＼電車の中から首を出して見ても、もう境もなく目じるしも無くなつて居るのである。社會生活の萬花鏡に比べると、書籍は保守的であり又壽命が長い。他日この畫集が若い後代の人々に繙かれ、之を一括して昭和文化の精彩を放つものと、讚歎せられるといふ時が來ようとも、なほこの複雑なる表現の中に、幾階段とも無い昔が包容せられ、先づ行くものを惜み慕ひ、辛うじて残るものをなつかしむ切々の情が

溢ち溢れて居ることだけは看取せられるであらう。今日年をとつた多くの閑人が、屢々想ひ起し又話題とするあの杉の屋敷林、雲を突くやうな樺の大木、楨の生垣や榛の木の並木、さては道端の道祿神や渡し場の細い棧橋、辻堂の張子の達磨や杉の葉の酒ばやしといふやうなものも、昔とはいひながら何れも年代があつて、大抵は江戸がよく開けて、町から外へ出る者が多くなつてからの、新しい愉快な變化だつた。その一つ以前の寂寞の武藏野にも、やつぱり人が住んで次々の開發はあつた筈だが、さういふものはもう埋もれ切つて居る。昔も諸君のやうな同情に富む觀察者と、斯ういふ精巧な技藝とがあつたならば、どの位有難かつたらうと思はずには居られない。

しかし其中でも此頃の變り方は、大分又以前とはちがつて居る。故跡は廢墟とはならず、思ひ切つて新らしいものが其上に造り上げられる。さうして又今まであつたものを、記念しようといふ氣持は薄らいで居る。國の運勢の大飛躍する時代としては、是は少しでも不思議は無いのだが、この點を知つて居ないと、本當は歴史は書けない。第一に今まで

はどうだつたかを示し得ることが、實は今の新らしさと悦ばしさを、説いたり論じたりする者の資格なのである。以前は寫眞のやうな親切な技術はまだ無かつた。是を自由に利用することは、明かに現代の幸福である。この恩澤を次に來る人々と分たんが爲に、少しでも文化の變遷の上に注意するといふことは、是も亦今までの世には無いことであつた。この書の出現によつて、更に世の中は新らしくなることゝ私は信ずる。

(昭和十七年五月)

川崎隆章編『岳』

山に大きな愛情を寄せて居る我々が、一生かゝつても氣づかずにしまひさうなことが、この本を読んで居ると次々と考へられて來る。先づ第一には山を知り山に親しみ、それを

又心有る者に語り傳へようとする人が、是ほどにも日本には多かつたといふこと、是が少なくとも私には發見である。編纂者の川崎君などは、定めて以前からはをよく知つて居て、それで斯ういふ新しい計畫を立てられたのであらうが、他には恐らくは私と同じやうに、今まで或一つの境涯に立つて、感じ又思つて居たことを、めい／＼の仲間だけに分つのに専らで、よそにはまだ色々の變つた話題があり、しかも結局は大きな歸一、自然の聯絡に導いて居ることを、考へる機會をもたなかつた方々も少なくは無かつたらう。衆人の力を集めて見るといふことは、いつの場合にも重要な經驗だと思ふ。

私は久しく山の中の小路、人の隠れたる交通といふことに心を傾けて居た者である故に、何かといふと直ぐにさういふ方へ持つて行かうとするが、いかに幽かな草に埋もれた山路でも、あたりに住む者の誰かは知つて居る。知つて居たればこそ踏んだ跡が道となり、中にはその跡は既に絶えて、有るといふことのみがなほ認められて居るものさへ多いのである。天下を一貫した公道といふものに、必ず他の一方の端が繋がつて居ることを考へると、

たとへ身親しく其土の上を、歩むことが出来なかつたにしても、是まで軽々しく人跡未到などと、たゞ傳へられて居た岳の陰谷の底まで、すべてこの微妙なる千古の綾の糸に、かがり縫ひ取られて居たといふことを、心づくだけでも學問であると思ふ。

この本によつて始めて知つたものも多いが、現代の學者文人は、實によく新らしい山的路を越えて、それを又熱情を以て人に説かうとして居られる。百花繡爛ともいふべきさまさまの文章詩篇を、順序よく排列した編纂者の技能も鮮かだが、私などの更に深く欣ぶのは、是を見て行くにつれて知らずに居たもの、もつと知らねばならぬと思ふことが、却つて段々と多く又適切になつて来る點である。或は將來の風潮の爲に、豫め餘地を留めようとした用意かも知れぬが、今まで各種の山の報告を讀んで、是で十分だと思ひ、又やゝ重複の嫌ひがあるとさへ感じて居たとは反對に、爰には明らかに満たされぬ願ひが湧いて来る。關東以北にもまだ幾つかの名山が談り残されて居るかと思ふが、西の方へ行くと吉野熊野の群嶺、それから中國では大山や三瓶山のやうに、旅人が遠く山の姿を望んで、どん

な僅かな消息にも耳を傾けずには居られない岳は多い。四國では又劍山石鎚の山麓、九州は阿蘇から霧島まで、もしくは市房高隈の如き秀でたる山々は、昔から人も行通ひ、又當世の登山者も常に狙つて居る。是等を同列に説くに値せずとして、すべて省略したと解する者などは一人も無い。ましてこの以外の尋常無名なるものに、却つて物深い神祕が藏せられて居ることは、この本の中にも幾度か例示せられて居るのである。察するところ現在幾分か抑制せられて居る知識欲、山を愛する人々のやゝ偏したる趣味を、斯うした方式を以て出来るだけ均等に、刺戟して見たいといふ計畫なのであらう。もし想像の如しとすれば、この手段は確かに成功して居る。山と日本人といふ問題は是によつて、綱や鳶口を携へてあるかぬ人々の間にも、普及せずには居ないからである。

獨り山岳の問題には限らず、汎く日本の同胞の爲に心付かせなければならぬことは、此世には今日まで知らずに居ることが、莫大に多いといふことである。學ぶに方法を以てすれば、知ることは必ずしも困難で無いのみならず、既にはつきりと一部の人のだけは知つて

居て、是をたゞ他の知らんと願ふ者に、傳へ覺らしめる道の無かつたものも多いことである。無かつたと言はうよりも、寧ろ求めなかつたといふ方が當つて居る。それがこの一巻の書の因縁によつて、先づ山々の埋もれたる古道から、次第に明らかになつて行くのは羨しいことである。我々の生活は刻々に改まつて居る。昔私などの山と親しんで居た時代には、今謂ふ雪山も無く、岩壁登攀もまだ起らなかつた。巖に鐵の鏈を垂れた山は多かつたけれども、それに縋つて行く者は、主として精進をした信徒であつた。頂上を究めた心の悦びは古今同じでも、そこで行逢ふ人々の心願は全く別であつた。さうして一方には歩荷人足の交通はやゝ廢れて、その代りには私たちのやうに、ひたすら嶺の向ふに出て見たいといふやうな、新らしい旅客が寄つて來ようとして居たのである。新たな文物が我々の見聞を弘めて居たと共に、過去に向つても知るべきものが段々と展開して、元は何でも無い通常の事が、歴史の珍奇とさへならうとして居るのである。割據の悲しむべく不利なることは、恐らくは今は昔に數十倍して居る。さういふ時節に際してまだ新らしいもの、統一

が完成してしまはぬうちに、あらゆる境涯の知識と經驗とを、比べて明らかにしてきて大いに考へようといふ氣風が、起つて來たといふことは國のしあはせであつた。さういふ意味に於て私は、岳の一書の出現を慶賀するのである。

それから今一つ、是も私には小さくない樂しみであつたのは、是ほど異なつた立場に居られる人たちの文體が、山に關する限りはいつの間にか非常によく接近して居て、もう昭和十八年の文章と名づけてもよいものを、作り上げて居るといふ一事である。私は特に川崎君に依頼して、この本の校正刷を讀ませてもらひ、彼を除いては最初の愛讀者となつたのだが、幸ひに是によつて今まで考へて居た如く、現時の文體の亂雜を極めて、この先どうなつてしまふかといふやうな、心配を除き去ることが出來た。是だけは計畫の外であつたかも知れないが、斯ういふ數十人の道の長者の、文章を併せ讀むことによつて、我々の受け得る感化は大きいものであらう。さうして此序文の筆者などの、苦しみ抜いて居る文體などは、あはれや亦一つの過去のものになつてしまふことであらう。(昭和十八年四月)

松木時彦著『神都百物語』

初版「神都百物語」は、私が多分最終の讀者であつたと思ふが、今度の増補擴大版では必ず最初の愛讀者にならうと念じて居る。以前の物語は新聞の連載だから、幾分か目先きをかへる爲に、題目が早瀬の流れの應接に遠無きが如くであつた。今度こそは深く清く湛へたるものから、掬むことが出来るであらうと信ずる。松木翁の學問に向つては、日頃私などは松蔭の泉の音を聴くやうな懐かしみを抱いて居る。豊富なる神都古典籍の涉獵には今後も或は少壯の學徒の、精勵を翁と競はうとする者が出て來るかも知らぬが、是に加味するに新御代の隆運に對する大いなる感激と、六十餘年の世相變化の批判と、悠久なる家の昔に結ばれた無数の思ひ出とを以てし、それを一つの學究生涯に組み上げるといふ様な

機會は、望んでももう得られさうに無い。その稀有なる體驗と蘊蓄とが、幸ひに翁の壯志に由つて、十分に整理せられて永く世に傳はるといふことは、獨り此土地此時代のみ、大切な記念といふに止らぬのである。我々などの見た處では、此事業には今一つの新らしい意義がある。出口延佳翁以來、伊勢の學者の弘く社會の爲に講説した人たちは、他の同僚からは却つて幾分か疎外せられて居たやうな姿が見える。つまりは一般の意向が、餘りに内輪のことを語り過ぎることを欲しなかつたのである。ところが松木翁の場合は之と異なり、世は既に改まり人の出入は繁く、今や翁は殆ど唯一の代表的故老である。神宮の故事新事を語り傳ふべく、最も適任なる文字通の御内人である。松木翁がもし語らなかつたならば、或は後代の日本人が、永遠に知らずして終るものが有りはせぬか、氣遣はれるのである。それで私はまだ見ぬ「神都百物語」が最も多くの同胞に讀まれると同時に、更に最も多くの前代事實を、網羅して居ることを祈願して居るのである。

辻本好孝著『和州祭禮記』

本書の一小部分が、雑誌『磯城』に連載せられ始めてから、もう六七年になるかと思ふが、私は其頃以来のよき読者の一人であつた。父が神官をして居て始終神様の話を聴き、又神書にも若干の親しみを持つて居たつもりだけれども、この中に書いてあるのは痛切なる事實ばかりであつた。祭は改めて今一度、根本から見なほして行くべきものであるといふことに、やゝ遅時きながら氣づいたのもこの御蔭と言つてよい。序文を書く位はいと安い小さな報謝のわざである。しかしそれにしても、大和にはまだどれほどの資料が残り傳はつて居ることか。是だけの年數をかけて、出たのは僅かに磯城の一部の、それも主要なるものに止まつて居る。まだこの周圍には世に隠れ人に省みられざる、律儀な古風な山間

の村々が、數多く控へて居るのである。彼等が昔の事を忘れてしまふのと、斯ういふ記録のすべて備はると、どちらが早いであらうか。私は筆者辻本君の壯志いさゝかも撓まず根氣と體力の永く續かんことを期すると共に、更にその感化の次々の同時代人に、波及せんことを念ぜずには居られない。

奈良縣の識者たちに告げたいことは、第一には此書の刺戟によつて、新たに前代文化を見なほさうといふ眼を開く者は、決して私一人だけで無く、寧ろ却つてこの一區域の中よりも、縣外に多いだらうといふことである。都府には祭禮と言へばたゞ御輿をかつぎ、屋臺を曳き挑燈をぶら下げ、わつしよいどんちやかを以て終始するものゝ如く、きめ込んで居る者が比々として皆是であつた。斯ういふ報告を其輩が讀んだならば、どれだけ喫驚し又深思するであらうか。當路の指導者たちは、今までは敬神を以て唯一の道德と認め、祈願成就の歡喜と、神徳體驗の感動に向つては、わざとかと思ふほど共鳴をさし控へて居た。従つて役所と交渉のある大祭とその他のもの、所謂公祭と私祭とのけぢめは年を追うて著

しくなつたが、斯うして祭を奉仕する人々の側から見れば、何一つとして差別の點は無いのだつたといふこと、是が又この書物によつて、いとも無造作にわかつて來るのである。神に頼らうとする信心の出來るだけ薄い人たちに、神社行政を取扱はせようとした方針は近頃はもう改まつて居るかと思はれる。今まで神職ほど本を讀まぬ者は無いといふ評判が高かつたのも、實は疑問がまだ目の前のものでなかつたからであつた。ところが今度といふ今度こそは、考へ明らかめずには居られぬことが多い。この千古を曠しうする大戦役に直面して、心の奥底から國民の祈願することが、成ると確信せられるのも又せられないのも、繋るところは祭たゞ一つの他には無い。その祭の法式が人により環境によつて、各地まぢまぢになつて居るとすれば、何がそのあらゆる變化を一貫して、大昔以來の精神を傳へて居るかを、見究めるといふことが先づ大切である。よそはどうしてゐるかを問はずには居られぬといふうちにも、少しでも古い時代の慣行を保持して居る地方ならば、自分から進んで語つてくれなくてはこまるのである。和州祭禮記はその要求の片端は充たして居るが、

地域が狭いばかりか説明もなほ十分とは言へない。其動機を擴大し又補強する意味に於て、私は心ある大和の讀書人に、この書の精讀を勧めんと欲する者である。

—それで茲にはごく簡単に、我々縣外の者が如何にこの辻本氏の勞作を利用して、學問上の効果を擧げようとして居るかを述べて、かつは推薦者の責を果たし、かつは又今後同種の企てが延長して、更に磯城以外の各郡に試みられる日の、参考に供したいと思ふ。それが同一著者の精力の持續となつて現はれるのか、但しは又新しい共鳴者の呼應して起つ者があるか、何れにしたところで楽しみには變りはないのである。第一に素人連の問題になりさうな點は、たつた一つの郡だけの記事が、斯んな大きな本になるやうでは、しまひにはどうするかといふことであるが、さういふ事は些しでも苦にはならぬ。今まで多數の者の知らずに居た事實、殊に神國の神を祭り申す事實に、知らせるには及ばぬといふ部分があるが有らう道理は無い。寧ろこの様に詳しく説く必要があつたのは、餘りにも知らぬ者の多過ぎた證據なのである。行く／＼之をはつきりとした常識にする方策さへ講じたら、幾ら

でも重複を避けて、もつと印象を強くすることは出来るのである。大和は平民に早く文字の教育が進んで、村々の祭には舊記證文の類が多く、其年代は三百年の長きに亙つて居る。倦むことを知らざる辻本君が、見かけた以上は悉く、之を載録せずには居なかつたのも尤か知らぬが、斯ういふ文章には振假名も句讀點も無く、おまけに文字の使ひ方にも無理があつて、其まゝ本文の中に挟み込むといふことは、無駄では決して無いが幾分か消化を害する。それ故に私一流の讀書法として、最初この古文書だけには紅インキで鈎をかけて置いて、茲には何十年前の史料が具はつて、参考になるといふだけを明かにして置いて、先づ其残りの現實のものだけに眼を通し、是は大切だといふことを心づいた點だけに就いて、記録はどう書いて居るかを骨折つて見なほすのである。記録の精確さはいつの場合にも記憶を超越するが、なほ現在の事實のやうに、あらゆる實驗を以て之を確かめることが出来ない。國民の慣行が時と共に移り改まることを知るには何より有力な證據であるが、しかも今日以後に起るべき問題を豫想し、又その解決を指導するまでの任務はもつて居ない。

だから我々が先づ活きた事實に關心を寄せ、古い文書はたゞその理解に必要な程度に於て、後から追々と役に立てるといふ方法は誤つて居らぬと思ふ。

それから第二には索引の問題があるが、是は今までの經驗に依ると、讀者が讀みながら作つて行くものが、一番に効果は多いかと思はれる。著者の手に成つた索引は親切で隅々に行届いて居るが、通例は詳し過ぎ、又項目の重要性を差等づけることが出来ぬ爲に、骨の折れた割には存外に利用する人が少ないやうである。自身通讀の印象にまかせて、他日もう一度拾つて讀みたいと思ふ點だけを爪じるしすることは、何でも無い勞力であるばかりか、寧ろ書物との親しみを一段と深くする。さうして和州祭禮記の如き性質の本ならば、表紙か扉の裏の僅か一頁外の餘白でも、相應に便利な見出しが出来るのである。自分などの流儀では、大體に注意すべき事實を三つに分ける。第一には今迄全く知らずに居たこと、それは必ず將來の新たな知識の端緒だから、忘れぬやうにしなければならぬ。第二には此地方に限つて特に數多く遭遇する現象で、しかも村毎に少しづつゝの形のちがひ

が有り、それを繋いで見ると昔から今の世への、推移の跡が辿られるかと思ふもの、即ち亦本書の最も力を傾けて居る部分である。しかし我々の側からいふと、その以外にもなほ一つ、土地ではさほどにも氣を止めて居らぬことで、よそと比べて見て始めて意味がわかり、又は解釋のよい手掛りを得ることがある。日本民俗學の全國協同が始まるまでは、各地の郷土誌家は大むね孤立して、この同志を裨益し得たといふ満足も、味はふことが出来なかつた。辻本君の事業は之に反して、出ないうちからもう眼を圓くして世間が待つて居る。さうしてこの上まだどの位利用の方面が擴がつて行くか判らぬのである。殊に國固有の信仰の實狀に對して、朝野の關心が集注せられんとする潮時に、斯ういふ書物を世に送り出すといふことは、よつほど羨まれてもよい篤學の報いであらう。

例は幾つでも挙げられるが、さうすると序文が餘り長くなる。茲にはたゞ一つづつ、自分の索引にはどんな項目が注意せられて居るかを述べて、今後の探訪と觀察の参考にしよう。先づ第一には宮座の組織、其中から選り出す頭人その他の所役、是などは本書の狙ひ

だから、勿論第二種の知識であらうが、斯う雑然と並んで居ただけでは、一讀したのみでは腹に入らない。改めて各村々の細々とした差異を比較して見るには、表にでもして置くの他はあるまい。古例の食物も段々と手に入りにくくなつて、中には集まつてカシハを食ふといふ様な、驚く改良も出現して居るが、大體にはまだ前代の食制が保存せられ、殊にいはゆる清の飯の調製には、心力を傾けて居るのが尊とい。是は他の地方に今も稀々に傳はる同種の作法を併せ考へて、今日公定せられて居る一般の祭式の、頗る異國風なものであることに、心付かせる手段となるであらう。それから潔齋物忌の一般にやゝ衰頹した中にも、土地によつてはなほ嚴肅に守られて居る例がある。是と社交の進歩に伴なふ喪の穢れの不安とは、實際どういふ風に調和させて居ることか。是などは現今頻りに論議せられる公葬神式の採用に先だつて、是非とも詳かにして置かねばならぬ事實である。佛教が民間に入り込んだ一つの機縁は、斯ういふ忌のかゝる任務を一手に引受けてくれて、心置きなく年々の公けの祭を續けて行かせたといふ便宜があつたからではないか。穢れた火を以

て神の供物を調進しないといふこと、神に奉仕する者が喪に近よらぬといふことを、單なる迷信の一つに算へてしまふことは、少なくとも大和の頭屋たちの承服せざる所かと私には感じられる。

次に第一種の、この地方だけにしか見られぬといふものは、捜せば出て來るかと思ふが大きなものはまだ心付いて居らぬ。ちよつと喫驚したのは湯立の時などに出て舞ふ巫女をソネツタンと謂つて居ることで、どうしてさういふかは今以て見當がつかぬ。其後井上頼壽氏の京都古習志が出て、山城南都の神社にも園市といふ者の奉仕することを知り、それが發音でソネツタンと聽えるのだといふまでは合點したが、どうして園(ソノ)を附けるのかはやはり不審である。今日の文法には斯ういふ指示の例は無いけれども或は一定の人以外には勤めることの出來ぬ役といふ意味で、「其」を添へて呼ぶ風が有つたのでは無いか。沖繩諸島の靈地で園ヒヤブと謂つたものが幾つかある。單なる國語史の史料としてで無く、更に巫女そのものゝ以前の地位も、是から少しづつ推し測られるやうな氣がする。

最後に第三種の、外部研究者の參考となるべき知識、是は書いて居る人の豫想以上に多く、又大抵は大切な事柄のみである。たとへば頭屋の標幟として其家の表口に立てられるオハケサンといふもの、是は原田敏明氏さへも由來まだ明かでないと言はれ、其名義に關しても依るべき説は無いが、ともかくも西は中國の一帶から、東は北陸關東の村々にまで分布して居て、名を同じくして形の相異があると共に、異なる名の下によく似た形のものも多い。近畿地方は幸ひにして實例に満ちて居るから注意して行けば少なくとも、之を設ける様式と趣旨とまでは明かにし得るだらう。名稱の分布の是だけ廣いのは、一度は京師の標準語であつたことを意味し、古い記録の中にどうしても見付からぬとしたら、中世以後に於て出來た言葉かも知れぬが、物までが新たに始まつたものとは私には考へられない。他にも同種の場合同じ場處に、やゝ異なる形とちがつた名とを以て、木を立てるといふ習はしは弘く且つ久しいからである。何か斯ういふものだけに別の名を付ける必要があつたことは、祭の幟(ノポリ)なども同じかと見られる。多くの實例に就いて、このオハケサ

ンの特徴を見究める必要があり、従つて和州祭禮記の記述は有力な資料であると共に又是ばかりで井底の蛙の判断を下すことも出来ぬのである。近世以降の神道書を見ても明かなやうに、幣串の制式と觀念には大きな變遷があつた。大體に形が小さくなり又移動の盛んになつたのは、教義の進展に伴ふものとおぼしく、その爲に寧ろ舊來の態様を守り、古い法則に依つたものが、次第に別途の取扱を受けることになつた場合も有り得る。本書の中にも頻々と出て來るいはゆる幣ふぐりの如きも、今日はそんな粗野なる名稱を認める人も無からうが、私たちには見過し難い大きな暗示がある。白紙に清淨なる洗ひ米を包んで下げることは、九州の方ではオトビともトビの米とも謂ひ、中央では又オヒネリとも謂つて、神參りに缺くべからざる捧物であるのみか、正月は特に一家の重要な器具に一つづつ附けて置く習はしもある。斷定することはまだ慎しまねばならぬが、是が一つ一つの物體に魂を入れ、おしようねを付ける方式であり、串を神聖なるものとする唯一の條件であつたやうに私は思ふ。祭の幟の端にも今では括り猿のやうな形になつても、斯ういふ袋を

下げた例が多く、又正月望の火祭の柱にも、穀物を入れた袋を下げる處は多い。幣にふぐりを添へることをまだ忘れて居ない地方ならば、何かオハケサンの方にも之に似た特色あるものは附けなかつたらうか。まだ注意した人が無いならば、是からも注意して見たい。

話が意外に長くなつたが、終りに一言だけ、著者に向つ言つて置きたいことがある。戦時の新聞記者といふ繁劇なる職に在る辻本君が、なほ寸暇を割き寢食を忘れて、斯ういふ人からは好事と看られがちな著述を繼續して來たといふことは恐らくは深く心に期する所があるのであらう。國の文化史が之によつて進み、一般國民の神と祭に對する考へ方が、之によつて又大いに改まるべきを信じなかつたならば、たゞ道樂を樂しみ博聞を誇る爲ならば、他に之よりも遙かに平易なものが有るからである。果して私の祭する如しとすれば著者はこの上にもなほ働かねばならぬ。といふわけは正直な話、此本はまだ決して完全とは言へず、又他人に説く方法としては、必ずしも十分に簡單明瞭だとは言へないからである。獨力でそれがもし爲し遂げられぬとすれば、願はくは其熱意を心ある同郷の人々に傳

へて、少なくとも之を最終のものとしてせざることを切望する。

(昭和十九年一月)

須山計一 共著 『信濃の祭』
諸田益男

祭の美しさ、祭の空気にもある柔かな古風な感じといふものは、言葉には寫し難く、寫真にも容易に傳へられぬものといふことは、夙くから自分も知つて居たが、今度、長野縣農業會の畫集を見るに及んで、其以上に更に村々の祭が、微妙な點に於て村毎に少しづつ、ちがひを持つて居るといふことを教へられた。各郡一箇所の、やゝ知られたものだけを拾つて見ても、もう是ほどの特色といふものが目に立つ。是をたゞ一つの概念に基づき、もしくは各自の故郷の例から類推して、日本全國皆同じと思つてゐたら、遠い昔の世の文化

29926

を理解する上に於て、どの位大きな損害であつたか知れない。私などの知る限りでは、神祭りの行事は中世以來、次々と改變せられて居る。殊に都會の流行が手本となつて、新しい催しものが幾つでも附加はつて居る。さういふ中に於て國の端々に、是ほどにもまだ多くの古例が残つてゐたといふことは、今日の時勢としては言はう様も無い心強さであり、又是からの學問の大切な足掛りでもある。須山計一君の如き氣持の人は、是からもなほ大いに辛苦しなければならない。さうして我を空しうして多くの同志を集めなければならぬ。長野縣農業會の文化部の諸君は、たゞ一國の好事業に率先し得たといふことに満足するのみで無く、更に此感銘を國內の今なほ迷ふ者に、傳達しなければならぬ。問題はただ郷土の誇りといふやうな小規模のもので無いのである。日本の隅々には、斯ういふ素朴な美しさを抱へながら、まだその民族的な深い意義に、心付かずに居る者が多かりさうに思ふ。どうか成るだけ弘く此一巻の書が、遠近各地の愛國者の手に頒たれんことを、心から私は祈念して止まない。

(昭和二十二年三月)

中山徳太郎共編『佐渡年中行事』
青木重孝

久しく期待して居た佐渡の年中行事が、今度いよいよ公刊せられることになつたので、先づ校正刷りを假りて一通り讀んで見た。ちようど自分も今「歳時習俗語彙」の整理に取掛かり、九月節供のところまで来て一休みして居る。この一巻の書に對する感謝と興味とは、恐らくは何人よりも深い。それを片端でも書留めて置くことは、必ずしも島外の愛讀者のみとは言はず、佐渡で直接に此行事に携はつて居る諸君にも、亦若干の参考になるかと思ふ。

我々にとつて大切な發見は、節供年取り等の期日は島中一様であつて、其日の慣例には村毎に又は部落毎に、可なり著しい變化があることである。今までたゞ一箇處の事實を聞き知つて、佐渡では斯うして居るなど、謂つて居た者に、是は誠に意外なことであるは勿論、島に年久しく共に住む人たちでも、斯うして比べて見て始めて隣とのちがひに心付き、改めて土地の風習といふものゝ意義を考へる人が少なくはないであらう。この風習の異同には幾つもの原因が有り得る。たとへば他所に年月を送つて居た者が、感心して持つて還つて來た小改良もあらうし、又それとは正反對に、律義なる舊家の家風を固守する者があつて、一門配下を統制して居たといふこともあらう。相川などには越後を素通りした、江戸直輸入の文化もあつたと言はれて居る。新らしい御手本ならば、色々と手近にも有つたわけである。しかも一邑一郷黨が、擧つて遵奉する方式となるには、相應に根強い力がなくてはならぬ。流行と模倣とは變化の一つの理由ではあらうが、結局はやはり前々から斯うして居たといふ人の意志、即ち爰へ入つて來た家々の歴史が、今でもまだ痕跡を留めて居るのである。佐渡が男女各一人の漂着者の婚姻によつて、始まつたといふ傳説はもう信

じなくともよいであらう。

時代と条件とを異にした幾つかの移住層、その相互ひの交渉と調和とは、島を郷土とする者の殊に關心を持たずには居られない歴史であるが、是まではまだそれを尋ねて見る手掛かりすらも無かつた。今回はとにかく諸君の骨折によつて、疑問の種が提供せられたのである。此世に因縁といふものもし有るならば、是に答へ得る人も行く行くは、諸君の中から出ることゝ私は思ふ。順序として先づ知らねばならぬことは、島では相互ひに是ほどちがつて居ることがそれぞれに遠く隔たつた土地に於て、何人も氣付かない一致を持つて居るといふことである。だからそちらの方から引越して來たと、速断することは無論出來ない。偶然かも知れぬしこちらから行つたのかも知れぬし、又は古くは一般であつたものが、飛び飛びに消え残つて居るのかも知れぬからである。しかしとにかくにさういふ他處の類似を、少しも考へないでは何の結論も下されない。さうして京都とは全くちがつて居て、遠い田舎どうしよく似た行事を守つて居る場合も中々多いのである。京都の

風俗は既に三百年も前に、黒川道祐の日次紀事などが出て居るので、之を動かぬ標準のやうに見る氣風が、本を讀む人の中には生じて居るが、是も中世以後に田舎から、持つて登つたものが實は多いのであつた。歳時習俗の根源を農圃の間に求めることは、少しでも不自然な所業でない。さういふ中でも後々の改作の少なかつたかと思はれる島地の生活などは我々には頼もしいのである。佐渡の郷土史が是を貴重な資料としなければならぬと同時に、諸君は更に一步を進めて、之を日本國內の他の有縁の土地の人々に、利用せしめるやうに心掛ける義務がある。

此書が佐渡人の専有に屬してはならぬ理由を、小さな二三の實例で説明するならば、正月十五日の前の晩に、餅や團子の類を挿して飾る木は、ほんの五六種しか無いが、地方によつてちがつて居る。信越關東から東北にかけて、最も多く用ゐられるのはミヅキ、又ミツサともカギの木ともいふもので、其間にまじつて稻藁に餅を小さく附けるものもある。關西の餅花は除夜の行事になつた處も多いが、是は美觀を愛したか又は稻穂から轉じたか

現在はしだれ柳の枝を垂れたものが多い。佐渡で榎木の枝を是に使ふといふ例は、絶無でもあるまいが東日本によほど類が少なく、之に反して九州も南の三縣に行くと、所謂メダマの餅は今でも榎の枝に挿すのが普通である。榎は小枝が美しく又繁く、其上に燃して火の色が花やかだといふ二つの特性をもつので、塚や祠や路傍の木として大木が存するのみか、春は若芽の色を見て農事の時を知り、年の豊凶を卜する風も多く、其名のエノキも吉木の義だらうと私たちは想像して居る。奥羽の方面でも初山の日のぬさ掛けには、大抵は注連繩を屋敷まはりの榎の木に引掛け、代りに其小枝を少し伐つて来て竈に焼くので何處へ行つても此木だけは變つた形をして居る。是ほど人生とは親しみの深い木が、現在は既に飾花の木として用ゐられない土地が多いのは、一應は習俗の改定と見て置いてよからうかと私は思つて居る。もしさうだつたら佐渡には古い形が、まだ片端には残つて居るのである。

この習俗の一般的なる改定といふことも、想像して見れば原因はあるのである。ミツキ

は冬に入ると小枝の色が紅く美しくなるので、最初から此木を餅花の木に好んだ者もあつたか知れぬが、他の一つの特徴は此木の名、即ち水木といふ名が附けられた位に、早期から樹液をよく吸上げる木であつた故に、後追々とは是に火防せの力を感じるやうになつたのかと思ふ。飛驒の山村ではミツクサ三尺などと稱して、わざわざ此木のそぎ板を屋根の一部に、葺くといふ習慣も私は目撃して居る。爐の鉤にする木は一々當つても見ぬが、今でも大抵は此木を用ゐるらしい。素より此木の水が現實に火を消す力は無く。理由を尋ねて見れば枝裂けがせぬからなど、説明する者も出来て居るだらうが、なほ其動機には言葉の力、即ち水といふ語の價値が相當以上に重視せられたといふことが窺はれる。火災の経験と不安は世と共に加はつて居る。單なる常識でも斯ういふ呪法は考へ出せなくも無いがなほ一方には五行の教理に通じた人の、暗示指導といふことが想像せられるのである。所謂簞篋陰陽の歴史は、近世は殊に埋没しきつて居るが、是が田舎の精神生活に、多大の影響を與へて居ることだけは争へない。博士と名のつく者は大抵は門附け物よしの類に

墮落しても、其の知識のきれぎれになつたものだけは、山伏も學び神主も學び、僧侶も一通りは心得て居る者が多かつた。年中行事はもとより、其他の生活上重要な作法で、明かに彼等から教へられて、固有の仕來りを棄て、居るものは、決して小正月の餅の木だけでは無い。今日流行して居る都鄙の俗信は、言はず安倍晴明の足の垢のやうなものが多いのである。それが相應に古くから入つて居たことは、佐渡にも痕跡があるので、私はいつもこの外來の異分子が、容易に見分けられる形で残つて居ることを喜んで居る。一つの例を拾へば五月節供のチマキを食ふときに、こたん太夫の首取つたと唱へ、又は六月朔日の齒固めの餅を、こたん大王の骨を噛むといふ類は、他の多くの土地で鬼の首、もしくは鬼の骨といふ代りの名で、類例は有るかも知らぬがまだ記憶して居ない。コタンは明かに蘇民將來に對する巨旦將來のことで、既に釋日本記の中にも備後風土記なるもの、逸文として傳へられ、尤も陰陽家の珍重する所の、武塔天神の由來譚であつた。弟の蘇民が貧にして恭謹なりしに對して、兄の巨旦は貪慾で神を禮せざりしによつて罰せられたことは、古い

日本の神話とも合するが、たゞこの固有名詞だけがこの一派のものであつた。それを此島の一隅に於ては鬼の名前として記憶して居たのである。節供の色々の行事の目的を、片端から惡靈の防衛であるやうに、解説することが既に新たなる學識であつた。白虎通とか風俗通とか、日本では見たこともないやうな本がいつも引用せられる。それを受賣する人が、もう斯んな處にも來て居たのである。即ち爰でも習俗はやはり變れるだけは變らうとして居る。

或は斯うした外來の異分子を一つ一つ取退けて見て、やつと國固有な純な姿が見出さるものとすれば、是は容易ならぬ大仕事であると、勇氣を挫く人も無いとは限らぬが、自分等はさういふ考へ方はして居ない。國民を理解する爲に大切なのは、根源よりも寧ろ経過である。中古に我々が異教の感化を受けて、年中行事の一部を改めたといふことも、それ自身かなり大きな歴史であり、それに置換へられた今一つの形が、有つたといふことが判るだけでも、それだけは祖先の生活が正確になるのである。その以前の形といふのがど

んなもの、乃至はどうして始まつたかを詳かにすることは、今はまだ少し面倒のやうだが是とても方法は既に備はつて居る。たゞ幾分か氣を長く、比較の結果を待つて居ればよいのである。大體に事物の名稱様式、もしくは人の記憶や記録の證據によつて、新たな借り物といふことの判つて居るものを除き、残りは一應は全部昔から持傳へて來たものと、見て掛かるのが安全かと私たちは思つて居る。さういふ中でも僅かに比較によつて、あれと是とはどちらが前からであらうといふことの、ほん見當が付くものが幾らでも現はれて來る。斯うして變遷の歴史を現實の基礎の上に組立てることが、實は根源に近づいて行く、最も間違ひの少ない途だつたのである。事は小さいけれどもやはり此本から例を取る方が話がしやすい。佐渡の正月の羽子板遊びには、伊豆七島と同じに竹製の羽根を突く村が今でもある。是と木穂子の黒い實に羽毛を附けて、憂々と好い音を立てるものとどちらが古く、どちらが改良であるかは大よそ明かで、双方並び行はれたといふことも考へにくい。木穂子が山野自生の木でも無く、又和名も知らぬやうな外來の品であること、京都の室町

期の上流生活に於て、頻りに胡鬼子胡鬼板の贈遣が歲端に行はれて居たことなどを思ひ合せると、是が流行の経路がほゞ推測せられる。しかも全く木穂子を知らぬ外國にも、此遊戯は相應に弘く行はれ、是を新年の信仰行事のやうに考へて居る處は、伊豆の島々にも有るらしいのである。彼地の方言はたしかハギイと謂つて居る。佐渡では現在何と謂ふか知らぬが、ハゴもコキノコも共に不可解な名である。或はこのハギイを中に置いて段々に由來がわかつて來るので無いかと思ふ。少なくとも將來懸離れた若干の土地に於て、同じ問題を尋ねて見る機会があるとしたら或は改良以前の狀態が存外にまだ残つて居て、佐渡がその一つの例であつたことを、確認することが出来るかも知れない。

島々の習俗の遠方の一致といふことは、恐らく世界中で日本のみが、實驗し得られる學問上の機會である。自分は前に方言の類似に就いて、一二の例を拾つて見たことがあるが今度の佐渡年中行事の忌の日の問題は殊に新らしい。忌は山城のイゴモリ安房のミカリ等に於て、村の大祭の重要な一部を爲すものが、若干は世に知られても居るが、その祭典

の部分が既に變化して、家々の小規模な儀式となつた後まで、なほその忌だけが獨立して、嚴守せられて居る事實は島だけにしかまだ報告せられて居らぬ。佐渡の忌の日は正月と十一月の二十九日が最も多く、是に二月の三日とか十二月の卯の日とかいふものが附加せられて大體に忌の終期を推定せしめる。是にやゝ似た例は壹岐の島に有つて、こゝでは六月の二十九日、即ち夏越の祓の前の晩が忌である。隱岐や對馬も常民の信仰が、相應に強烈な處のやうに思ふが、そこでは此仕來りがどういふ形に變らうとして居るか、早く此ついでに尋ねて記録して置きたい。沖繩群島にも我々のまだ理解し得ない幾つかの古い村祭がある。或はそれ等の儀禮の背後にも忌の日と近い感覺が潜んで居て、島の人たちはまだ之を表示して居ないのであるまいか。伊豆の七島でも日忌といひ、もしくはキの日といふ日があるが、是は共通して正月の二十四日の晩、もしくは其前後の數日を謂つて居る。島と島との往來が制限せられて居た爲に、この方面の傳承には近世の變化が多く、之を比べて見ることは爰だけでも大きな興味であるが、なほ今まで全く相知らなかつた遠方の土

地と、併せて觀察したならば發見が殊に多いことと思ふ。忌の形態の把握し難い所以は、それが不行爲であり又内部の經驗であつて、外から來た者の耳や眼に、映するものが何も無いからである。是ほど土地の學徒の實驗の集積と、又親切なる理解とが必要であり、更に精確且つ鮮明なる記録の欲求せられて居るものは無いのであるが、果してそれ程まで大きな意義のあるものだといふことを、佐渡の諸君は知つて居るのかどうか。今はまだ少しく心もとない。

是まで多くの地方で公表せられた年中行事は、何れも言ひ合せた様に盆と正月との慣例に力を集注し、残りの三百四十餘日に對しては、ほんの一割内外の面積しか與へて居ない。世間に出て住む人の故郷を懐ふ機會が、どうしてもこの二度の休みの日に多く、其他は追と幼時少時の印象が薄くなるからであらうと思ふ。實際都會には日曜も無い人があり、節供も大抵は常の通りに働く日になつて居る。町でこしらへた年中行事の概念に、地方の人々が引込まれがちなのである。私たちが今でもまだ不審に思つて居るのは朔日二十八日

といふ二つの日を、昔は月毎に重く視て居たことである。或は是も忌の日の研究によつて明かになつて来るかも知らぬが、とにかく現在はまだ二十八日を、どうして大事にしたかを説いてくれる人が無いのである。さういふ中でも五月二十八日などは、伊勢でも住吉でも御田植の日であつて、曾我の仇討や或宗派の祖師の命日から、始まつたもので無いことは確かなのだが、多くの土地では既に休日の目録から除かれ、何もして居ない故に傳へられることも無い。佐渡ではまだ少しばかりの痕跡が残つて居るやうに思ふ。是などももう少し力を入れて、是から先の調査を続けることが必要であらう。小さい題目に就いてはまだ色々述べて見たいこともあるが、段々纏まりが悪くなるからもう是で切上げる。たゞ終りに今一度くり返して置くのは、佐渡の習俗は島限りで、一つの孤立した複合體をなし、是を細かく見て行くと、大よそは島の開けて來た順序がわかるかと思ふことである。無論その爲には遠近の比較を遂げなければならぬが、それも語彙の整理によつて、手軽に出来る日がやがて来る筈である。佐渡が對岸の越後と似ない點の多いことは、早くから注意せ

られて居るやうだが、現在は向ふがまだ詳しくはわかつて居ないのだから、うつかりしたことは言へない。しかも岩船郡以北、莊内秋田へかけての弘い地域に行はれて居る行事と可なり近いものが佐渡にもある。此中には稀には彼方から持つて來たといふものもあらう。たとへば河原田の七夕の晩に、蠟燭出せ出せ、出さぬとかつちやぐぞといふなどは、北は北海道の旭川の附近まで、又日本海側には處々で流行つて居る。よほど子供には痛快な言葉のやうだが、カツチャグといふ動詞は此島ではあまり聽かず、又蠟燭といふ商品よりも古くから、此の風習があつた氣遣ひは無いから、多分は船頭か誰かに傳授してもらつたものである。次には近世に一度こゝを通つて、北に向つて進んだかと思ふものもある。彼岸の團子を作るのを怠つて、忙しく稻刈りをして居る傍を、二人の婆さんが話しながら通る。あんまり腹が立つから出がけに子供を一人、爐の中へ蹴込んで來たといふので、どきりとして歸つて見たら我兒が焼け死んで居たといふ話。この彩色には新らしい染料が入つて居るが、是も東北と西南とに於て何箇處と無く採集せられて居る。しかしさういふ運搬

の跡の顯著なものがあるに拘らず、私はなほ古くから、何處を原産地とも無く傳はつたものが、偶然に爰と北南の一隅だけに消え残つて居た場合の多いことを信じて居るのである。八朔や亥子は是とは反對に、東日本には一般に殆ど名も知られず、近畿以西に在つては今でもこの二つの日は重く取扱はれて居る。佐渡だけは附近の例とちがつて、關西と同じに八朔を祝ひ亥子の日を休んで居るが、然らば此風だけは西の方から、ぼつんと運んで來たかといふと、何人にも然りとは言へまい。要するに古い習俗には消えたり廢せられたりする機会が多く、それが大抵はとびとびに斑になつて改まるのである。さうして島には何等かの餘裕があつて、其變化の起り方が鈍いのである。即ち古い慣例は保存せられやすいのである。

一度何かの縁につれて入つて來たものは、前からあるものとうまく折合つて、共に止まり村々の細かな變化を呈し、又新舊の層を見せるのである。他の島々でも恐らくは大よそ同じだつたといふことが、遠からず一般に認められる日が來るのであらう。佐渡年中行事

の功績は、島が大いに研究すべきものであることを、我々に心づかしめた點に在ると思ふ。單に一郷土の過去文化の爲に、好個の記念塔を打立てたといふに止まらず、同時に總國の學問に向つて、是まで利用せられなかつた一つ進路を指示してくれたといふことは、たとへ無意識なる結果であるにしても、永く後代の感謝する所となるであらう。佐渡の舊友の一人として、何よりもそれが自分にはうれしい。

(昭和十三年七月二十一日)

日本放送協會編『日本民謠大觀 關東篇』

民謠の探訪は、歌詞の方面ではもう五十年も前から始まつて居る。政府の事業としては大正三年の文部省の俚謠集が、全國四分の三以上の地方から、同時に提出せられた資料を

整頓して、見ごとな記録を世に傳へて居る外に、一方民間に於ても、前には大和田建樹、前田林外、大島寶水等の諸氏があつて、各々その廣汎なる蒐集を公けにし、近くは白鳥省吾、北原白秋といふが如き知名の文士諸君の熱心な首唱によつて、新たに各地の同志の手で集められたものも多く、其一部は既に我々の利用に供せられて居る。個々の小地域内の獨立した採録に至つては、素よりその數量を究むべくも無いが、現に自分などの目に觸れた、書卷の形體を具へたものだけでも、大よそ百種には近からうかと思はれる。是等のすべてを統合比較して、この歴史ある一個の古文藝の、流れ傳はつて現代に到達した姿と足取り、殊に國民の内部生活との接觸面を明かにしようといふことは、今となつては容易ならぬ大きな仕事になつて居るのである。

歌詞によつて民謡の社會的意義を考へて見ようとする者の、最初に當面する一つの疑問は、是がたゞ懐かしい過去文化の遺物であるのか、但しは又現實の一要素であつて、生きて活き抜かうとする同胞國民の多數の、生存の一部を構成して居るものであるか、短く言

ふならば生きて居るのか化石かといふことである。新時代人の行動には、新たな間拍子が幾つとも無く加はつて黙つて働く勞働といふものが多くなつて來た。乃ち民謡は既に亡びたのだ。まさに消滅の崖の端に立つて居るのだといふ説が、外國ではくり返し唱へられて居たのみならず、我邦の採集の中に於ても、明かに歌の文句を年寄の記憶に聽いて録し、又は前人の書留めの中から寫し取つたものさへある。昔歌はれたことが有るといふ、甚だ心細い推測の下に、歴史としてこの莫大な記録を、受取らなければならぬかと、思つて居た者も、實はあつたのである。然るに、今回の日本民謡大觀が世に出るに及んで、日本は少なくともさうで無かつたといふ、悦ぶべき事實が立證せられることになつた。たとへその中には全郷土の住民が、擧つて合唱し得るものが半數にも充たず、僅かに二三の老翁老婆のみが覺えて居て、もう二十年も歌つたことが無いと謂つたり、又は祝ひごとや酒宴の餘興に、名をさし所望してやつと聽けるやうになつて居て、従つて艶の有る澄み切つた聲を以て、我々の耳を悦ばしめ得なかつたりするものが、若干はまじつて居らうとも、とも

かくも曲はなほ生きて居たのである。さうして今度の日本放送協會の企劃によつて、辛うじて我々はさういふものまでも、相續することが出来たのである。しかもその以外になほ活潑なる壯齡の姿に在るもの、たとへ十年二十年は採集がおくられても、減びる心配は少しも無いものでも、是を一國の公有とする爲に、且つ民謡の盛りの姿を知る爲に、手の届く限りは共に集めてあるのだから、單なる保存事業では決して無い。今まで自分などが氣付かずに居たことは、節と歌ひ方の土地毎の變化であつた。歌詞のすぐれたものには轉用流用が多く、同時に又広い地域に共用せられても居る。文句だけから見るとたゞ一つにしか算へられない田植唄や臼唄が、各地著しい曲のちがひの爲に、並べて幾つでも比較をして見る必要があり、或は又新たに一つの項目を設けなければならぬ場合もある。言葉の民謡が既に日本には非常に多いのだが、異なる曲の数は又それよりも遙かに多かつたことは、本書の目録を俚謡集などの分類と比べて見て、誰にでも容易に認め得ることで、是だけは全く豫期せざる發見の喜びである。

民謡研究者の抱いて居る第二の疑問は、今ある大多數の歌の文句は、何れも近世語であり、且つ現在の地方語をまじへて居る。樂器の新らしい輸入と普及とに伴なうて、新規に始められたものばかりが此中には多く、上代我々の祖先の心を樂しましめ、鬱結した情緒を暢べほぐして居たものとは、一旦絶縁して系統を異にして居るのでは無からうかといふことである。永い歲月に亘つた外來音樂の感化といふことが、全く無かつたといふことは相像し難いが、もしかして其根柢基調をなすものにまで、それほど大きな古今の變革があつたとすると、之によつて國の本來の姿を探らうとする、我々の心構へは改められねばならぬのだが、よもやさういふことは有るまいと、密に私なども今も考へて居る。官府の計畫によつて、組織立つた採用の行はれた樂部の音樂ならば別だが、誰の指導もなく自然に民衆の間に展開して來たものが、或時期を劃して全く原則を異にしたものに、乗替へるといふことは想像しにくいだけでなく、寧ろその反對に古い固有の約束を守らなければ、効果が生じないといふ考へ方が、祭や儀式の歌については、つい近頃まで消えずに居たので

ある。然らばどういふわけで民謡の歌詞が、此様に皆新しいのかといふ疑ひは誰にでも起らうが、それは全く民謡の性質が、歌手は元より聴手の耳にまで、不可解なる言葉のまじることを許さなかつたからで、一種の現代譯と替歌の新作が、小さな民間の小天才の口によつて、毎日毎夜のやうに試みられて居たのである。無論その中には澤山の失敗と落第もあり、もしくは仲間の軽々しい雷同附和もあつて、其爲に文藝としての著しい價值の高下、玉石混合のまゝで持傳へたものも多からうが、とにかくに即興歌詞の簇出といふことは、寧ろ古くからの曲譜の尊重から、出發して居るものと私などは考へて居る。さういふ考へ方の正しかつたかどうかは、今度は愈々この民謡大觀の公判によつて、精密に試験せらるべき端緒を得たわけである。西洋で考案せられた五線譜の採譜法が、果してこの民間音楽の眞實を描寫し得るかどうか、といふ不安が有ることは屢々聽いて居るが、私はこの方面には全くの無識だから、何と一言も口を出すことは出来ない。たゞ素人ながらも見當を付けて居るのは、たとへこの譜によつてもう一度、農民漁民の通りに歌ひ出すことは出

来なくとも、一つの法則に依つて表示したものならば、少なくとも全體の傾向は見られるであらう。即ち甲乙丙丁のどの部分に類似があり差異があり、しかもその各篇を一貫して居る特徴がどんなものであり、それが大陸からの貢ぎものであつたのか、はた又斷乎として純なる日本的なるものか、乃至は遠く久しく東亞の諸民族の間に、おのづから相通じて居た何物かを潜ませて居るか等を、假に即座では無くとも、漸次に明かにして行く足場にはたしかになるだらうと思ふ。問題は寧ろ是だけ多くの集積に就いて、一々丹念に比べて行かうとするやうな、意欲と精力とを兼ね備へた人が、すぐにも此事業に目を留めてくれるか否かに在る。自今我々が想像して居る如く、もしも我が國の民間音楽が、一つの大きい革新期に臨んで居るといふことが事實ならば、この根本資料の集積を度外に置いて、前途を計畫することは先づ不可能と言つてよいだらう。

終りになほ一言、簡単に此事業の成立を説くならば、本集に整頓せられた資料は、ほぼ三つの部分から成つて居る。その一は日本放送協會が過去二十餘年の努力を以て、採集保

存して來た民謡の録音盤で、分量に於ては是が最も多い。次には委員の一人たる町田嘉章君が、前後數ヶ年に亘つて全國を行脚し、自身採録して還つて來たもの、是は會てその一小部分を公けにしたこともあるが、頒布が弘くないので今度再び此集の中に入れることにした。第三には新たになほ一回、細かに地方を搜索して特に録音して來たもの、關東地方に於ては、この部分が相應の量に達して居る。以上三つの材料を合せて地方別に曲目歌詞を按配し、本書に見るが如き體裁をとりのへたものであるが、編輯の勞は町田君専ら之に當り、採譜の最も六つかしい仕事は、藤井清水君が主として之を引受けられた。日本放送協會が、この征戰多事の日に於て、なほ且つ事業の文化的意義を確認し、倦まざる努力を以てその急速の實現を期したことは、必ず後世の感謝して止まざる所であらうし、之に次では町田、藤井の二君の辛苦經營も没却すべからざるものであるが、自分も樂屋に出入して居る爲に、思ひ切つて褒め立てることが出來ず、又斯ういふ立派な本が出て行く以上は、その必要もなく寧ろ褒められたよりなほ嬉しからう。たゞこの關東地方の一巻の次に、引

續いて奥羽の巻を公けにし、更に進んでは帝國の全版圖に及ばうといふ企てが有るのだから、出來ることならば世上の好反響を以て、是等の關係者諸君を鼓舞激勵し、更に新たな張合ひを以て、働きつゞけてくれられるやうにしたいものだとは念じて居る。

(昭和十八年二月)

小笠原謙吉著『紫波郡昔話集』

筆者のおばあ様が、又その祖母の話を書いて覚えて居たのを、わざ／＼孫の爲にかたつて筆記させたといふことは、岩手縣の農村でも無いときかれぬやうな古風な話で、日本の民間説話の歴史を知らうとしてゐるものには、まことに楽しみが多い史料であつた。故佐々木喜善君が今から二十何年前に、是を『紫波郡昔話』として爐邊叢書の中へ入れた時

にも、此點ははつきりと述べて居るのであるが、どういふわけか同君は、二三別の人のした話を其中にまじへ、又僅かながら筆記とちがふことを書き込んで居るさうである。それを小笠原氏がいやがつて居られるといふことを、何度か岩手の人から私は聞いて氣に病んで居た。好い機會も無くて歳月が過ぎて居たが、今度三省堂から全國昔話記録を續刊する計畫が成り立つたので、早速私は原筆者に手紙を出し、分量は是くらゐにして、其話を思ひ通りに並べて御覽なさいと言つてやつたところ、自分は不平を人に洩らした記憶は無いが、もう一度整理して見たいとちやうど思つて居た際だから、出してもらへるなら有難いといふ返事で、それから二三回延引のことわりが來た後に、いよいよ此原稿が私の手に届いたのは、本年の五月十一日付であり、それから五日後の十六日發の葉書も、まだ私の机の上に置いてある。その小笠原君が同じ月二十一日の早朝に、腦溢血で突然亡くなられたのである。

この書を印刷に付するに際し、是非とも言つて置きたいことは、是が原稿には紫波郡昔

話選集と題せられて居たことである。筆者は我々の計畫に應ずる爲に、その記憶の中から先づ書きやすい是だけを整頓して、出したものと思はれる。前の『紫波郡昔話』と比べても、此方が少しく敷を減じ、且つ幾つかの前には無かつたものを加へてある。事によるとまだ若干の手控へを遺して居られるのかも知れぬ。既に文章になつて居るのなら其まゝをまだ書いて無いやうなら題目だけなりと、他日私版としてでも世に出して見たいと思ふ。東北各地の昔話は佐々木君の老嫗夜譚や聽耳草紙、即ち上閉伊郡の採集を始めとし、次々整理して置きたいものがまだ幾つもあるが、各郡各家に傳はつて居たものは、興味ある敘述のちがひはあつても、話の題目はおほむね共通して居る。それ故に同じ一人の話者の記憶に、數多く保存せられて居たといふものが、たとへ破片であり殘欠であつても尊といのである。さういふ中には最近の一世紀間に、何かの理由があつて消え去つたものが、曾ての存在だけを痕づけさせてくれるかも知れぬからである。たとへば喜多村氏の嬉遊笑覽の中に、江戸にも古く存したと記して居る蟹と老爺との話の如きも、東北には今三箇處ほど

に毀れて残つて居るので、是が古い頃の人望ある一話であつたことだけはわかる。或は又藤原相之助翁が、故郷の生保内にあつたと報ぜられた錦長者の話なども、今ある瓜子姫子よりは形が古く、粗野な部分もあるが結末は美しい。是などは山母と山梨の實の話として又佐々木君の採集中にも其片影を覗かせて居る。小笠原氏が後まわしにせられた昔話の中には、或はこの類のまだ我々の知らぬものが、少なくとも曾てあつたといふことを語るものがあるのではないかと思ふ。

私は大正三年の始め頃から、書物では折々小笠原氏と交通して居た。岩手縣に旅行したことも五度や六度では無かつたが、いつかは逢つて語る折が有ることと思つて居たばかりで、終に一べんも話を聴くこと無しに永別してしまつた。世の中は既に改まつて來たから、もう此人のやうな靜かな落着いた、昔の東北人らしい風格の人を、見つけて友だちになることは私には出來ないかも知れぬ。それを考へると今少しこちらから進み近づいて、この舊家の傳承を尋ねて置かなかつたことが残念である。せめては後に留まつて居る日記手記

の類を、散佚させず又誰か後の人に利用させることを、嗣子秀夫君に向つて希望せざるを得ない。

(昭和十七年九月)

鳥袋盛敏譯『遺老説傳』

遺老説傳に對する私の愛着は、人に談つても信じられまいと思ふほど深い。今から二十年前ばかり前に、金澤博士秘藏の本を借用して、井上といふ老人に寫してもらつてから、四度は少なくとも朱筆を手につつて精讀した。讀んでしまつても尙しばらくの間は、机の上に留めて置く必要が毎度あつた上に、惜しみつゝもしばしば知友に貸して讀ませました。半歳と續けて書棚に休息して居たことの無い、私の文庫の中では最もよく働いてくれた本

の一つである。伊波氏の『古琉球』によつて、南島の學問に目を開いた私は、更に遺老説傳によつて沖繩が好きになつた。大正十年の春の旅は、實は此書に勤められ又誘はれたと言つてもよい。さうして島に行つて得た友だち又親切なる指導者が、比嘉島袋の二君であつたのである。その二君は今や遺老説傳を校訂和訓して、始めて之を世に公にしようとなつて居る。私がもし一言を是に題しなかつたならば、寧ろ不自然であつたかも知れない。そこで改めてもう一度、何が此書物の盡きざる怡悦であり、人を把へて離さない魅力であつたかを考へて見るのに、それは必ずしも事實の奇、もしくは叙述の巧みといふやうな表面のものではなくて、寧ろこの一篇の成立した時代環境、花に譬ふれば之を咲かせた土と水、空氣と日の光のやうなものが尋常で無かつたのである。我々讀者は半ば無意識に、この單なる文字の排列を透して、背後に動くものに觸れ且つ楽しんで居たのであつた。故郷の歴史を熱愛する二君の努力は、恐らくは之を紹介して十分であらうと思ふが、自分も亦一側面の觀察を附記して、試みにその解の合致するか否かを檢して見たい。この島の漢

學は、ちようど近世の洋學と同じやうに、至つて短い期間に勃興した形跡がある。才能ある少數の士人が、自在に異國の文章を驅使して、生活の一部を表白し得た頃には、夙くも周圍には其意圖に共鳴し、其技術に讚歎する多數が輩出して居て、可なり容易にこの新しい好尚に風靡せられたかと思はれる。しかも其變化は急劇であつた爲に、是と伴うて一般の生活觀照、思惟の方式までを推移せしめる邊が無かつた。此點は頗る京江戸の漢學の、最初から經義儒道と相提携した場合とはちがつて、寧ろ今日の所謂語學者流の學問とよく似て居る。だから沖繩の文章には奈良朝の風土記にあるやうな蒼々たる古色が窺はれるのである。教養ある故老の切實なる生活興味も、子弟郷黨の均しく耳を傾けんとした事蹟も悉く前代信仰の埒外には逸して居ない。漢文はたゞ是を表出する簡便なる外形に過ぎなかつたのである。この新舊の文化複合は、本土住民等の久しく經驗し得ざるものであつた。本居大人のいはれた和魂漢才は、こゝに奇抜なる一實例を留めて居る。新たな革袋は極めて芳醇なる古い酒を盛つて居たのである。

遺老説傳の一書は、二百年前の沖繩人の欣んで聽かんとした物語が、如何なる種類のものであつたかを我々に教へる。當時島々の交通は既に繁く、海上の好奇心は盛んに燃え立つて、人が多くの古傳を平凡視したらうことは察せられるにも拘らず、その話柄は大別して三四の類を出でず、それもすべて皆彼等の書契以前に、系統を尋ね得られるものであつた。島に久しく住む多くの民族も同じやうに、彼等は此上も無く物の起源を重視し、それが甚だしく古いと知つて満足する。その傳説が土地に屬すれば其土地は拜所となり、家に屬すれば名門となり、利害に繋がる者が漸く衰へると、口碑の特に耳を驚かすに足る部分が、更に誇張せられて流傳しようとする。即ち我々のいふ昔話の起りである。この變化の順序はどこに行つても、大よそは同じ事のやうであるが、たゞ南島に於てはこの一篇の説傳あるが爲に、他の何れの場合よりも具體的に以前の民間傳承の有りのままを、動かぬ形を以て保存して居るのである。

殊に昔話の研究者の爲に、大切なる資料と言つてよいものは、現在日本の各地に飛び離

れて、今でも口から耳へ語り傳へられて居るものが、幾つとなくこの前々世紀の遺書の中に錄せられて居ることである。私は以前に一二の著書の中に、既にその大部分を採用して居るから、爰にはたゞ其項目だけを擧げるが、(一) 睡蟲の次良が長者の掣になつた話は、隣の寢太郎の名で私なども子供の頃から聽いて居る。(二) 繼母が繼子を殺さうとして、誤つて實の子を崖から落した話も、中國九州の諸處でいふ話である。(三) 神が生れ兒の運勢を定めるのを、其父が假宿して立聽きしたといふ話などは、西には却つて少なくて關東奥羽に類例が多い。(四) 十三の少女が、父無くして身ごもり、後に其子と共に神になつた話などは、遠くは賀茂三輪の神傳以來、少しづつ形をかへて今日まで府縣に普及して居り、(五) その神秘の父が蛇形の神であつたといふ形は、内地でも半分はまだ傳説として信じられて居る。(六) それから尻を落したのが爲に追出された母を、後に其子の賢しい言葉によつて、再び元の地位に喚び戻したといふ話も、奥州まで分布して居るが沖繩のは古い形を存して居る。其他(七) 大力が力競べにやつて来て、嚇かされて還つた話とか、(八)

寶の壺を粗末にしたら、白い鳥になつて飛去つた話とか、またこの以外にも幾つかの一致が見られる。後に此書物を見て我々が學んだと言はぬ限り、當時既に存して又是だけの弘い分布があつたことを證するものである。詳しい比較は讀者を煩はすより他は無いが、自分たちの最も珍らしく思ふ一事は、是等の昔話の大半が、更に南の小島の宮古島で採集せられて居ることである。是には何等かの偶然の理由があつたのかも知れぬが、又一つに傳承の様式に、宮古だけは著しい特色があつたのである。仲宗根氏の家に傳はつたといふ宮古島舊史を見ると、島の口碑は委くアヤゴと稱する律語によつて暗誦せられて居た。さうして多くの昔話までが、こゝではアヤゴになつて傳はつて居たらしいのである。「民族」といふ雜誌には、ニコライ・ネフスキイ君の最近の採集があり、又新たに作られたアヤゴも載つて居るが、是と昔話との關係は今はまだ精確には知られて居ない。將來我々が實地に就いて、もう一度此問題を調査しようといふ場合には、遺老説傳がやはり最も有力な參考書である。

水原岩太郎著『備中土面子の圖』

五十年前には私も熱心なメンコ黨の一人であつたが、この水原君の好事無双の著に接するまでは殆ど一度も是を思ひ出して見ることが無かつた。さうして新たな感興の下には可なり鮮明に記憶は蘇へるものだといふことを、今度は又實驗することが出来たのである。私の育つた中部播磨の一村では、メンコといふ名も知らぬことは無いが、是をメントクといふ子供の方が多かつた。古いのは素焼の淡彩のものであつて價もたしか一厘に七八つ位のものゝやうに覺えて居る。それが光澤のある濃いゝ手のこんだ彩色のものになつて價が高く、子供の間にも換算率が出来て取遣りが甚だ面倒になり次第で追々大形のものが見られて來るに及んで、是を用ゐる遊戯は衰へた。明治二十年に關東の田舎に來て見ると、

既に今でもある紙メンコが流行し始めて居て、土製のものは有つても之を顧みる者が無かつたのである。二種のメンコは遊び方が丸でちがつて居る。土のメントクの遊戯は數種あつたが、其中で自分が本來のものゝやうに思つて居たのは、参加者から各二個三個のメンコを出させ、それを親になつた年かさの兒童が手の内であらゝ振つて地面の上に撒く。其中の裏を見せたものは脇へのけ表を見せたものだけを又振つて、最後にたつた一つ残つたメンコの主が勝つて他のメンコを皆收得する。少しづゝ違つた規則で試みることもあつたが、やはり面白いと思つたのはこの單純な遊び方であつた。親になる子供によつては、いつ迄も思はせぶりに振つて居て仲々明けない。他の兒童は一人も残らずその間口々に自分の出したメントクの名を喚びつゞけるので、その騒々しさは一通りで無く、家によつては縁端で此遊びをすることを許さなかつた。よその村々を通つて居ると、そこにもこゝにも三人四人の少年少女が路傍に蹲まつて此遊びに耽り、頻りにメンコの名を喚んで居るのが私たちには強い印象であつた。メンコに數十の種類があり、且つそれ／＼に名前があつ

たのも、他の種の遊びには必要で無かつた故に私は是を元の遊びだらうと思つたのである。子供たちは其名の一つ一つを知つて居るだけで無く、同じ種類でも我がものと人とのを差別する爲に、もしくは縁喜や色々の行掛りから、それ／＼に特殊の綽名を付けて喚んだ。其中にも妙によく勝つのと負け易いのがあり、又は持主の愛憎もあつて、負けても代りを出してその大事なメンコは持續して居たが、中には意地悪く代りを許さぬといふ勝負もあつて、久しく愛して居た好選手を奪はれ、力を落したことも覚えて居る。此集のメンコは産地も別であらうし、又畫が上手でも無いから違つたやうに見えるものも有るらしいが、それでも見て行くうちに昔を思ひ出すものが多い。第二の翁といふ名は私の在所には無かつたが、是とよく似た顔をしたものは見馴れて居る。エビスサマでは無かつたかと思ふ。第四のオタフクは無論あつた。第五第六の武者といふのは私の村にもあつたが、形が不明で人望が無く、名も何と謂つたか忘れた。十二以下の猿は面白い形だが私たちは使つたことが無い。十九・二十の蟬はよく覚えて居る。帳に算盤に枱又は扇とか劍とかいふ類

は、後に入つて来て珍重せられたやうであつた。全體としてこの備中のは数がたしかに多く、始めて見るものが幾つもあるが、どうも此以外に、私たちの仲間にはあつて茲に見えないものが大分有るやうで、それをもう一つづつはつきりと想ひ出すことが出来ぬのが何とも言へず寂しく感じられる。子供の生活に取つては、遊戯は大人の政治よりも大事件であつた。従つて過去も無く又將來も無く、是を昔からの現實の全部の如く其當時は思つて居たのであるが、今考へて見るとメンコの歴史は短く且つ地方的にも色々の變化があり、又特殊なる沿革があつたやうである。振りメンコの方法が賽の遊びの新意匠であつたことは疑ひが無い。今一つの是も非常に面白かつた遊び方、其名は忘れたが土の上に線を劃し互ひに其中に自分のメンコを投入して先に入つたものに打ちあて、もしくは其から指の長さだけ近寄せて食ふと稱して相手のものを取る勝負なども、たしかに穴一から出て居る。私たちの批判は以前とても可なり嚴峻なものであつた。あれはよくない遊びだ、感心せぬ流行だといふ言葉を、私等は屢々耳にしたものである。彼等が今日の幼稚園の先生の如く

自分で案出したものを授けるやうなことは無かつたとすれば、兒童の自營力も以前は旺盛だつたと見なければならぬ。それを現代の教育方法と比べて見れば、是ほど著しい變遷は無いと言つてよいのだが、さて其問題を少しでも取扱つた歴史があるだらうか。所謂郷土玩具は蒐集せられて居るが、此方は既に最も其必要の無い人々の玩具と化し、しかも何故に昔は斯んなものを要したかを考へて見ようとする者も無いのである。水原岩太郎氏の篤志と精力は、從來は幾分ちがつた方面に消費せられて居たらしいが、私は今度の小事業を機縁として、氏自らも大切なる過去の記憶を復活し、同時に黙々として幼時を追懐して居る村々の老人たちに、各々心置きなく知つて居ることを語らせて是を永世の學問の爲に存録せられんことを熱望して止まない。

(昭和八年十二月)

石川縣圖書館協會編『町村誌編纂の栞』

現今の歴史教育に、まだ私どもが十分に満足して居ないわけは、その項目があまりにも限定せられ、且つ少しも伸長力が無いことである。誰でも認める通り、是は國民が最初に學ぶべき大切な事柄ばかりであり、その教へ方も確かに進んでは居るのだが、人の一生の間に知つて置かなければならぬことが、是でもう澤山といふ筈も無いのである。何にせよ永い年代に、世の中は變れるだけ變つて居る。變つて又變り、元が判らなくなりかけて居るものさへある。それを複雑な、又身勝手の者の多い社會の中に居て、大體に誤りの無い見通しを付け、且つ其知識をめい／＼の判斷に利用させようといふには、少しは其方面の指導も豫めして置いてやらねばならなかつたのである。歴史を學ぶ法、是が今日の普通教

育には缺けて居る。だから暗記となり、従つて又忘れる懸念が大きいのである。以前は歴史ほど、學べば又さきを知りたくなる學問は他には無かつた。どんな問題でも歴史家に聽けば判るといふ信用は、或は過當であつたかも知れぬが、とにかく人は過去に對する色の疑問をもつて居た。今日はこれで一通りは、知つたといふ自信のみが強くなつて、この學問に對する期待が非常に薄くなつた。それといふのがこちらの知りたいといふことは教へてくれないで、自分の知つて居ることばかりを押付けようとするからである。進んで歴史家に要望する所が、段々に減縮して來たからである。多くの郷土誌が郷土には讀者を得ず、折角の勞苦は埋没して、しば／＼餘計な道樂の如くに世間から評せられるのも、其原因はほど突留めることが出来る。つまり歴史の教育は此通り普及しつゝ、其利用の途は却つて昔よりは狭くなつて居るからである。是を學問の衰微といふ人があつても、必ずしも反對することは出来ない。

郷土を郷土教育の爲に研究しなければならぬと言つた人が、現在は最も惱んで居る。此

説が唱へられて既に二十年、何百萬人の兒童はどしどしと大きくなつたけれども、事業はまだちつとも成功して居ないからである。失はれた信用を取戻す爲には、人が信用するだけの力を示すことが、必要であるのは勿論の話だが、それには先づ以て少しばかり、歴史教育の目途を擴めなければならぬ。どんな小さな問題でも疑ひがあれば、自由に尋ねるといふだけの勇氣を、抑制する様な傾向を見棄てない限り、伸びるものが伸びずにしまふだらう。一國共有の歴史知識は、實は近年になつて可なり進んで居る。少なくとも知らうと思へば知る方法が具はつて居る。必ずしも何もかも解らぬことだらけでは無い。それは簡單なる僅かな要項以外、わざと教へまい又尋ねさせまいとして居たのである。他のあらゆる學科では疑問を誘導し、疑ふ力も無い者に代つて疑つてやる様にさへして居るのに、この方面ばかりは知識を限定して居た。限定は精選かも知れぬが、他面から見れば一部の閉鎖である。斯んなことをして置くから實際の生活に行つて、忽ち準備の不足を感じ、願みて學校教育の無力を非難して、次々に子弟のこの科目に對する熱情を、冷却させる結果にもなるのである。兒童が始めて過去といふ概念を把握し、歴史の存在を知つた時に、先づ起すべき疑問は大よそは定まつて居る。最も自然なる知識慾は周圍の生活、即ち關心の深い事物が、むかしも此通りであつたかどうか集中する。時代に大きな變化のあつたことは、漠然と多くの者は感じて居る。衣食や勞働の古今の差などは、親々の話を横から聽いても、學校に出る前からも少しは知つて居る。靴は昔もあつたか乗物はどうであつたか。それがどう變り又何故に變らなければならなかつたか、斯ういふ類の話なら皆悦んで聽き、又其次の子供らしい問を出すのである。假に能力が無く又萎縮して、大膽に疑ふことが出来ない者があつても、親切な教師ならば之を抑へて答へることも容易である。時が人生に與へて居る變化、今が昔で無いといふこと位大切なる歴史知識は他には無い。殊に我々の時代に於ては、如何なる事物でも大抵は皆良くなつて居る。少なくとも有形の文化に於ては、一つとして大御世の惠澤を感謝せず居られるものは無いのである。それを具體的に解説してやることは、百の談理よりも立ちまさつて、憂國勤王の心を養ふに有效

町村誌編纂の案

な筈である。しかも場合は土地毎に變り、實例は眼前のもので無いと、聽く者を動かす力が弱い。如何に巧妙に説いても國總體に通用する言葉は見出し難い。郷土誌の最も力を揮ひやすく、又收穫を擧げ易い點は爰に在つた。それを省みずして、徒らに人を退屈させるやうな固有名詞の羅列を事として居たのが、もしも世の教育者の企てゝあつたとすれば、是ほど見當ちがひの骨折は、先づ稀だと言つてよいのである。

今日のやうな多事多難なる御時世で無くとも、又直接に子弟を薰陶する任に當る人で無くとも、いやしくも郷土誌を郷土に遺さうといふ志のある者ならば、今後は少なくともつと明確なる目的をもち、且つもつと親切なる用意を以て、其仕事に臨まなければならぬと思ふ。單に世間が其積りで待つて居るといふだけで無く、是が又歴史といふものゝ最初からの、たつた一つの任務だつたからである。誰に如何なる場合に入用かといふ目當も無く、たゞひたすらに人の知らぬこと、もしくは自分だけが知つて居ると思ふことを、書立てさへすればよいと思ふ人たちも氣樂だが、一方にはその雜然たる博識を尊敬して、支持

を惜しまなかつた側にも責任がある。しかも是では困ると薄々は感じて居る人はあつてもさて其展開の機運を作るといふことは、必ずしも容易で無かつたらしいのである。今回の石川縣の計畫に對して我々が兩手を擧げて贊同の意を表したのは、是が久しく待ちに待つて居た革新の一端緒だからである。勿論勇敢なる試みといふ迄であらうが、斷じて失敗の前例は作らせたくない。大藤、大間知の二君は慎重を期する餘り、殊に周到熱心な解説を下さうとした結果、或は聽衆乃至は讀者に、面倒なる仕事だといふ印象を與へたかも知れぬ。結構な企てには萬々相違無いが、是ではうつかり始められぬといふやうな、引込思案を起させはしなかつたか。私一箇としてはそれを非常に恐れる。是非とも附加して置きたいと思ふことは、兩者理想とする所の完全なる町村誌は、豎にも横にも又斜にも、小さな部分に解き分けることが出来、是を一切れづゝ多くの人、多くの時期に分擔することが出来るといふことである。簡單なる終局の目標さへ合致して居れば、寧ろ出来るだけ多くの同志が、協力する方が望ましく、さうすれば又勞力なり出版の費用などに、厄介な問題を

起さずにはなむと思ふ。いよく實行に入るに際して、この點を指導者各位に、是非とも考慮して頂きたい。

調査は必然に難易の差があり、利用者の關心にも濃淡の段階があらう。出来ることならば最も記述し易く、且つ人の興味を引きやすい部分を先にして、もつと斯ういふものといふ御註文が、向ふから出るやうにしたら張合ひが多からう。今までの町村誌とは行き方が丸でちがふが、自分などの仕事のことを打明けるならば、一番最初には先づ多數の知りたがつて居る問題を探る。相手を青少年にとつて言へば、中には斯んなことを尋ねて笑はれると思ふ者が有り得るが、試みにその中の最も率直なる者に説いて、何でも問はせるやうにしてその問を整理分類してもよし、又平生の言行から察知することも不可能でない。或は此方から進んで二三の事實、たとへば衣類の變り、食品の新舊等、至つて有りふれたしかも彼等には意外なことを、取出して知らせて見るもよい。彼等の好奇心は必ず刺戟せられ、そんなら是はときく様になること受合ひである。私等の年輩の者から見ると、存外

な事が既に忘却せられて居る。今はもう昔で無いと百も承知して居りながら、そんなら何が改まつたかと言はせて見ると、實例は一向に列擧し得ない者は、必ずしも兒童のみでは無からう。ところが是を教へたがつて居る老人が、つい目の先に居るのである。郷土研究の第一歩は、むつかしい語で言へば文化の概念、又は時代の力といふものゝ認識である。何でも無いことのやうだが是を昔からと思ひ、昔も此通りだときめきつて居る所に、幾つかの誤つたる推斷が芽ぐまれる。それをさせまいとして歴史は普通教育の一科目となつて居るのである。故にたゞ單に眼の前の事物の變化、今は無くして昔は著しかつたもの、昔は全く無くて新たに生れた事物を、亂雜なる話の種としてで無しに、系統立てゝ知らせるやうにすることも、立派に郷土誌の一つの事業になるのである。

しかし若い人々の知識慾が、此程度で充足し得るもので無いことも亦明かである。子供は殊になぜといふ問をよく發する。變化に原因が無く理由の無いものは有り得ないから、問ひ疑ふ方が正しく又自然である。ところが是に對する答へとして、賛成し難いものが今

までには二つあつた。其一は古くからのもので、知らぬとは言はず、世の中はさういふもののだと、概括的に承認せしめようとする風である。昔はそれで承知し今日は大抵承知しない。さうしてそんなことをいふ老人を軽んじようとする。之に對して一方の極端は、何とかこちつけで一通り尤もらしいことを述べることで、是は信用せられるがいつかは聽手を失望させる。害は却つて前者より大きい。こゝで私たちの提唱したいことは、人間のすることなら誰にでも説明が出来る、といふ考へ方が間違ひであるといふことである。そしてこれを氣づかせることが私たちの願ひである。先生なら何でも説明し得る者と、相手に思はせて置くことは危険な話である。本に書く場合も是と同じことで、事實の存在をそれほどよく知つて居る以上、理由も知つて居るだらうと人が想像し、自分もその氣になつてつひいゝ加減なことをいふ。もしくは判断もせずに他人の説を受賣する。この風を是からは改める必要があると思ふ。勿論理由は必ず有る筈だが、何しろ永い年月の間に、この多數の人間が合同して、複雑に複雑を重ねて居る事情を、明かにするといふことは容易で

ない。たつた一つの郷土限りで、説明を付けようとすることは無理である。我々の計畫は全國の同種又は類似の事實を、出来るだけ數多く集めて、細かくそれを比べて變つて行く順序を見定めて行かうとするのであるが、それとてもまだ一つの假定である。是が各自の場合に當てゝ見て、果して其通りであるか否かを、何度も試験した上で始めてやゝ安心が出来るだけである。従つてそれが追々に明らかになる迄の間、少しは待つて居る様な心持を養はなければならぬ。さうして一つの縣内は言ふに及ばず、遠い地方の同志の人々との間にも、出来る限り調査の聯絡を取り、知識の交換が行はれる様に努めなければならぬと思つて居る。孤立と競争とだけでは郷土研究は決して完成しない。日本は幸ひにどこに行つても、生活の様式には似よつた點が多いらしいから、この相互の援助を推進めるならば、末には一つの郷土の綿密なる研究が、弘く全國の文化の成長を、代表的に説明するやうな時が来るかも知れない。この點に就いては二人の講師の、反覆して叙述せられたところが、私の意見と同じであつて更に精確である。もう此以上に言ふ必要はあるまい。

我々がこの石川縣の新計劃に對して、最も多く期待するものは進歩である。最初から一世に誇示する業績を挙げようとして、空しく時日を経過することは寧ろ危惧の種である。願はくは第一次に、忍んでやゝ卑近なる眼前の變遷を記録し、それに基づいて多數の新疑問を誘導して、徐々として是が解答の道を講じて行かれるならば、其次に來るものは恐らくはまだ何人にも知られない幾つかの發見であらう。發見は寔に學業の花であり芳香であつて、是あるが爲に我々は營々たる勞作の苦を忘れる。而うして時代は正にこの偶然なる啓發によつて、夢を醒し曉闇を破らんことを要求して居るのである。國家の康寧といひ人生の福祉といふものも、一として天の甘露の如く、突如として降つて來たものは無い。何れも一歩一步の確かな歩み、ほんの目に立たぬ人間の小さな體驗を積み重ねて、今はこの現在の状態にまで進んで來たのである。正しい意味に於て我々はおもつと賢くならねばならぬ。知れば避けることの出來る災害と失敗だけは、悉く避け得る所まで行かなければならぬ。それには學問を心から信頼して、國民が一致協同して、常に其成長の道を講ずる様

に、又其信頼に値するやうに、教育の効果を擧げることが急務である。時が非常時なるが爲に遠慮をしたり、少しは差控へなければならぬやうな學問は、平時に於ても格別に尊重すべきものでなかつたといふことが出來るだらう。この昭和十三年の記念すべき年に際して、新たに作り出されたる一つの機運こそは、やがて又次の大なる平和時代に入つて、いよくその輝かしい使命を果すべきものと信ずる。遠く前途を望めば此事業は決して小さくない。

(昭和十三年六月)

岩手縣教育會編『九戸郡誌』
九戸郡部會

九戸郡の諸君は或はまだ氣づいて居られぬかと思ふが、最近の國內の文化史學徒の、こ

の方面に對する關心は著しく深くなつて來て居る。是は獨り目前の一大問題たる東北振興の叫び聲が、何かその基づく所を風土と慣行、即ち地人交渉の特異性に、潜在せしめて居るらしき推測だけからでは無い。我々が弘く國總體の爲に、この急激なる百年二百年の變遷を回顧しようといふ場合にも、今ではもう九戸地方にでも求めないとの確なる前代の照準を見出すことが難いからである。近世の文化の北上して行つた経路は、汽車の無かつた頃にもやはり裏と表の二線があつた。裏の日本海側は開始のやゝ遅かつたらしきにも拘はらず、距離が短かく且つ水路の援助を得やすかつた御蔭に、幾分か早く終點に達して居る。湊を近くに持たない南部領の一隅は、勢ひ袋の底のやうな地位を占めざるを得なかつたのである。古い色々の生活ぶりは残り留まつて、時としては入替が容易でない。土地の新人は其の爲に苦惱するであらうが、一方には又この調和せざる對立に由つて、簡明に舊物舊制の存在を認め得られるのである。自分等が草鞋の旅をして居た時分までは、まだ到る處に斯ういふ機會があつた。例へば東京近傍では、伊豆の七島などには幾つともなき室町期

の社會相が、あからさまに傳つて居た。汽船が盛んに往來の人を運ぶようになると、一朝にしてそれが破碎せられ、又埋没して見分け難くなるのである。捜せば勿論都府の中心にも、昔の名残は無意識に保持せられて居る。たゞそれを尋常とし水空氣として、安んじて其間に生活する場合を見ようとすれば、遠く南北兩端の同胞を訪はなければならぬのである。其生活が果して平和幸福なものであるか、但しは又急いで蟬脱し逃避すべきものであるかは、少くとも史學の管轄する問題でない。しかも何人も争ふ能はざる事實は、今や此の状態は愈々終末に近づき、恰も孤燈の消へんとして一度光を放つが如き、印象を與へつゝあることである。九戸郡誌の編修が是も亦やゝ一般の風潮から立ち遅れて、ちやうどこの全國文運の一つの過渡期ともいふべき際に、異常の辛苦を重ねて漸く世に出るといふことは、實は豫期以上に適切なる意義があるのである。明治大正の御代替りの頃から、郡制廢止の前後にかけて、同種標題の著述はもう三百ばかりも刊行せられては居るが、彼等と是との間には大いなる目途の差がある。讀む者も書く者も共に新たなる用意を以て、之

に向はなければならなかつたのである。だから此書の後世に對する價値をほゞ理解した上でないと、適當な批評も出來ず、又十分に編者たちの辛苦を感謝することも出來ぬだらうと思ふ。

今までの數百の郡誌村誌を見渡すと、執筆者の心に描いて居る豫定讀者とも名づくべきものは、主として管内の同時代人であつた。其爲に強ひて市場を求めず。所謂關係者と附近の學校ぐらゐに頒布して、記念として之を藏置せしめようとした形跡が見える。然るに現實の用途はどうだつたかといふと、地方では之を讀破したらしい人が少しも無く、名を忘れ所在を失した例の比々として多に反して、中央の古書肆街に於ては、常に驚くやうな高價を喚んで居る。素より印刷部數の極度に制限せられた爲もあるが、一つには是が正しい利用者の所有に屬さなかつた爲に、用が無くなつても一向に巡環しないのである。著名なる若干の學校と圖書館とでは、經費を惜まずに今でも買集めて居るが、個人の文庫では第一に置場にも難儀する。僅か數十頁の有用なる記事を讀む爲に、厩大なる各一冊の郡誌

を並べて置くといふことは、容易で無い故に大抵は無く我慢をする。つまりは郡内の當時の人でないといふことは、見ても興味のない事に餘りなる勞費を拂ひ、其爲に出版を困難ならしめたのみか、更に窮極の利用者を失望せしめて居るのである。それも軒並び何等の特色もなく、たゞ有りふれたことしか目に映らぬ平野地方などは、一つを手に入たら鄰は略してよい様なものだが、なほ編輯の時と人とが違ふと、意外なる記事の精粗があるものである。ましてあの郡の郡誌なら是非見ようといふ外部の者にかゝる重課を負はしめる必要などは更に無く、いやしくも文筆を以て世に盡さうとする者の、それが本意でないことも亦明かである。九戸は最後に來つてこのあらゆる過去の經驗を利用し得た上に、其郡内の事物は世に知られず、且つ世の知らんと欲するものを以て充ち満ちて居る。従つて郡誌はその全編が既に價値あるものであらうが、なほ能ふべくは北鄰の三戸郡誌、もしくは備前の邑久郡誌などの如く、需要の方向又は階段に應じて、各部を分冊して印刷の數量を増減し、今少しく自由に他府縣の講學者に、それぞれ入用の知識を供與するの途が立てたかつた。そ

れが九戸郡に取つても亦決して小さい事業ではなかつたのである。

私は大正九年の八月末、二人の友人と共に下閉伊の海岸地方を旅行して、普代安家を経て此郡には入つて來た。野田と小子内の濱の宿と、僅か二夜の因縁しかもつて居らぬが、時しも蕭條たる秋風の日であつた故に、印象は今に鮮明に生きて居る。其の後福岡の木村君、仙臺の中川君、駒場の綿織君その他の教授たちが、それらの計畫を立て多くの學生を連れて、處々の村里舊家を訪ひ、調査せられた結果は公表せられ、又私などもその話を聽いて居る。最近には又同人の大間知君が、山形村に入つて前後三週日を觀測の爲に費して居る。是等の見聞談を綜合して見ても、我々はたゞ此地方の日常の生活中に尙進んで學び知らなければならぬ許多の昔風が傳はつて居ることを知るのみで、郷土の諸君に代つて解決し得たといふ様な問題は殆ど無いが、少なくとも外から見に來て何を感じ、何を珍重したかといふことを知るだけは参考になる。勿論その説く所にも思ひちがへはあり、又氣に食はぬ事はあらうが、それを吟味し又是正することも、實は國家に對する大切な奉公で

あつて、それを爲し得るのは主として九戸の人、又九戸郡誌を讀んだ人でなければならぬ。此巻の初頭に私をして數言を題せしめようとせられる動機が那邊に在るかは察しにくい。自分として斯ういふ所を利用して、讀者に談りたいと思ふことがあるのである。第一には此郡で或は通例と認められ、乃至は平俗にして説くに値せずとせられて居る生活諸相の中に、今はまだ學界の兼て知らうとして居る事項が、色々と残つて居るといふことである。第二には郷人をして我郷土を解し又愛せしめるが爲には、寧ろ利害を超越した外部からの物の見方に、倣はなければならぬ場合が多いといふことである。人を教へることは同時に又自ら學ぶの道である。一方にこの眼前の現實を直寫することが、其儘一國の學界に貢獻し得るとすれば、それは既に砂を化して金と成すの奇瑞であつた。その上に更に内外の協力によつて、徐々に我立場を知り成行きを會得し、多くの異なる郷土の經驗を參酌して、最も賢明に新時代の文化と、調和して行く方策が立てられるならば、今まで遅れて居たことは寧ろ損でなかつたのである。今度の九戸郡誌は非常なる勞苦をかけて、漸く完成した

一大雄篇ではあるが、將來ふり返つて是を舊式地誌の最後のものと謂ひ、もしくは東北研究の入門の書と評する者があつても誰も反對をせぬ時代が多分は到來するであらう。さうなつた曉は九戸郡は功勞者であり、又指導者でさへもある。徒らに一世の同情を集注して自ら慰めて居る如き状態とは、全然手を切つた朗かなる郷土になつて居ることと思ふ。それが又學問の理想である。

富木友治編『百穂手翰』

百穂君世を去つて十年の後、私は始めて角館の靜かな町をおとづれ、平福氏の故宅新邸の地を歸覽してから、更に富木庄助翁一家の好意を受けて、その神代村の田莊に行き宿した。百穂君の遺墨遺稿は數多く爰に藏せられて居る。それをなつかしき一夜の伴侶として

くり返し私は往時を追懐したことであつたが、殊に一行十餘人の仙巖越えなどは、單なる故郷に錦といふ以上に、壯快極り無き好記念として、今も印象が鮮かに残つて居る。さうしてこの百穂手翰の計畫が有ることを知つたのも、亦その際のことであつた。

それから後二年、漸く一卷の書が公表せられんとするに臨んで、こゝに又一回の人生觀照の機會を得たことは幸ひと云ふべきである。始めて私が百穂君と相識つたのは、明治三十八年の秋のことであつたと思ふ。内務省の諸君を中心とした報徳會といふ團體が其頃組織せられ、平福君はその依囑を受けて、雜誌斯民に畫筆を揮つた他に、毎月の會合にも必ず出席して居たやうである。私は少年の日、繪畫叢誌の愛讀者であつた故に、あの誌上を通じて穂菴先生を熟知して居た。それが恐らくは互ひに有力なる紹介の名刺となつたのである。次で翌三十九年八月の初め、報徳會の全國大會が三日に亘つて、相州小田原に開かれた際にも、平福君は出て來て會の爲に大いに働いて居た。會の終つた次の日の午前、私は後から來た兩親と妻に同行して、人力車を備つて箱根に入つたのであるが、其途中で

又百穂君の、一友と共に靴ばきで登つて来るのに、何回となく巡り會つたのであつた。あの頃は勿論電車は無く、人力の速力は徒歩よりも遅い處が多く、さうして又屢々休憩した。一旦帽子を取つてさようならを言つて別れても、次の茶店や曲り角で又顔を合せる。しまひには父も母もすつかり懇意になつて、色々な話をして居たやうである。斯ういうことがたしか二日續いて、それから又暫らくの間、會でも百穂君とは出會ふ折が無かつたのである。

我等兩人の一生の交渉も、何かこの箱根山中の旅と似たものがあつた。大正三年の春、自分が貴族院の事務局に入つた頃、平福君はまだ國民新聞の記者で、毎日議會の記者席へ來ては、遠くから私の方を見て居た。二度ほど新聞に苦笑するやうな漫畫を出されたことを記憶する。そのうちに何か用事があつて、訪ねて來られたので共に茶を飲んだ。あの有名な二葉より手くれ水くれの歌の話を、直接に聞いたのも此時のことであつた。隊長の黒板某が黒板勝美君の祖父であることを、まづ心づいて居られなかつたやうに思ふがどうで

あらうか。

ちやうど其時分、郷土研究といふ雑誌を私は編輯して居た。是には表紙畫に二色刷の農村風景を、鉢巻のやうにして出して居たのだが、今まで松岡映丘に描いてもらつたのを、取替へて見たくなつて居た。それを百穂君に相談したのも、やはり斯ういふ公務の序であつて、特に門を敲いて依頼したのではなかつたが、同君は快く之を引受けて、次から次とたしか三度ほど、面白い版下を郵送してくれられた。それが何れも五六號づゝ、この雑誌を飾つて居るのは、私に取つてはうれしい記念である。

それから又十年ほど間を置いて、民族といふ四季刊誌を出した際にも、やはり雙方がこの日の事を覚えて居て、今度は毎號一つづつ、何か一本の老樹を描いてもらうことにしたが、是にも百穂君は非常に面白い川楊と野梅とを畫にしてくれられた。この原稿は多分出版者の手に、今でも珍藏せられて居ることと思ふ。百穂君の畫業が大飛躍して、世を擧つて禮讚隨喜の聲を放つたのも、ちやうどこの中間の十幾年であつたが、私一人は境涯が

變動して、旅行にばかり日を送ることになつて居たので、段々と接觸の面が狭くなり、ただ遠方から評判を聴くのみで、顔を見るやうな場合は全く無くなつて居た。しかし此間にいつの事であつたらうか、歌集が世に出たことがあつて、是は確かに贈つて貰つて讀んだ。さうかうするうちに金鈴社が始まり、次で又伊太利旅行があり、自分の弟もこの二つに参加して居た爲に、次第に噂の傳はることが繁くなり、又歐洲の單獨旅行からは、折々なつかしい繪葉書をもらつたので、絶え／＼ながらも交際はなほ續いて居たのである。

文學美術の方面の人たちと私とのつき合ひは、この十何年間を境目にして、あらまし中絶して居たのであるが、さういふ中に於て百穂君の場合のみは、不思議に又返り咲きをしたのであつた。日は日記を捜さぬとちよつと思ひ出せない。珍らしくこの郊外の書屋へ、百穂君初度の來訪を忝うしたことがある。赤川菊村君が菅江眞澄の畫集複製を企畫して、それを多くの人に説いて居た頃で、何の前觸れも無しに、ふいと遣つて來られたのである。此事は私の著書にもざつと書いて置いたが、つまりは我々二人がもつと力を入れぬと、此

事業は成立たぬかも知れぬといふことを言ひに來られ、其爲に色々の實行案を示されたのである。私が菅江眞澄の顯彰に力を入れて居ることは、自他ともに許す所であるが、平福氏が是だけまで熱心だつたといふことは發見であり、又大きな激勵でもあつた。それで早速男鹿の五風を先づ出すことに打合せをしたのであつたが、何かの故障があつて取掛かれなかつたばかりで無く、是が又同君との最終の會談ともなつてしまつた。

本集に載つて居るやうな好い手紙は、一通も私は持つて居ないが、是を見て行くうちに自然とあの日の訪問の深い動機を、會得したやうな氣がする。是は好い事だと思ふと百穂君は、すぐに全力を擧げてかゝる人だつたのである。殊に有離いことには私などの蔭の努力に就いて、夙くから深い理解をもち、自身も亦斯ういふ方面に始終注意を向けて居られたので、それが自然に周圍の人々の趣味にも浸染して居たことである。白田塾から出た人の中では、この集にも名の出で居る吉田白流君、又野口義惠女史などが、我々の仲間の仕事を助けて居られる。さうして何かにつけて談故人に及ぶことが今でも多いのである。

それからもう一つ最近になつてから、私は圖らずも平福一郎君を識ることが出来た。是も老人らしくどい話をするならば一郎君は自分の末女の婿、太田といふ者の親友であつて、彼が南方戦線に出陣する前後、兄のやうな懇ろな支援を與へられた。さうして同時に又、自分の老友關屋貞三郎君の女婿でもあつたのである。一郎君は風貌も父に似、又性情もよく似た處が有るやうに思はれる。勿論もう時代もちがつたから、幾ら保存をする人が無いと知つても、もう此様なアンチームな手紙は書かうとはせられぬであらう。それがよいとか悪いとかの問題では決して無い。殊に百穂君の如きは、率直といふことに誇りを持ち、又私的打算の少しもまじつて居ないといふことに誇りを持ち、構ふものかと生前でも平氣であの微笑を湛へて居たかも知れない。現に自分の兄などもさう言つた氣質で、寧ろ心の隅々を疊んでは置けないやうな傾きが見えた。之に比べると私などはやゝ見え坊で、日記を書くにも手紙にも、いつも誰かゞ背後から、覗いて居るやうな氣がした上に、若い頃には相應にそんな手紙も出してあるので、何處からか出て來はしないかと、今以て意氣

地なくびくついて居る。だから是からはもうルソウの懺悔録のやうな、人の一生の立體寫眞のとれる様な、又時代を知るやうな手翰集などは、先づ出て來なくなるものと見てよからう。

百穂手翰の編纂者は、どこまでが公けの事件、どれからさきが私事か、分堺線を引くの迷つたと言つて居るが、それは迷ふべき問題でも無いと思ふ。自信ある生活をした者ならば、世を去つてしまへば私といふものが無いから、その遺物の全部が公事である。明治の中頃から、太平洋戦争勃發の前にかけて、斯ういふ手紙を書くやうな必要が日本に有つたといふことは、埋没してはならぬ歴史上の事實である。だから此本をたゞ縁故ある人々の文庫の中だけに、大事に藏つて置かうといふ考へであるなら、その點のみは誤りであらう。私は却つてさういふ私藏者の方を制限し、又頒布を郷土の周圍に止ることなく、汎く平福百穂の藝術を認識する人々に、又それをすら能くせざる後代の人々に、縁が有るならば讀み且つ味ひ得るやうな公けの機關に、この巻を保存させることに努めてもらひたい。

たゞ製作の都合によつて、この手紙の中にあつた澤山の草畫が、傳はらずにしまふことは私たちに惜しい。世の中がもつとくつろいだならば、それをもう一度寫眞版にとつて、古い知友や親族の間だけに頒つて、保存せられるのもよいことであらうと思ふ。

(昭和二十年二月)

佐藤氏日記『林澤歳時記』

この半世紀を覆ふ大記録、千人に近いかと思ふ登場人物の中で、私の知つて居るのは大曲の田口謙藏君、六郷の故高橋軍平君、この頃隣村に住む坂本龍太郎君、及びこの編輯をした赤川菊村君くらゐなもので、故人平福百穂・安藤和風・下岡忠治・深澤多市等の諸氏の名も出て来るが、是とても爰では微々たる端役しか演じて居ない。大曲と横手とは少し

ばかり覚えて居るが、その他の土地と來ては林澤は言ふにや及ぶ、角間川も六郷もまだ行つて見たことが無い。一言でいふならば私は他處の人だ。何だつて又斯んな他處の人に、序文を書かせて見る氣になつたのだらう。もしも輕はづみに私が承知をして、勝手放題な事を書いたらどうする積りであつたか。實に赤川菊村といふ人は無茶なことを考へる人だと、蔭で散々私は悪く言つたものである。

然るに結果に於て、私は林澤歳時記をすつかり讀み通し、さうしてこの長々しい讀後感を書くことになつたのだから、流石新聞記者の方寸は怖ろしい位のものであつた。最初この本の初刷が表紙も扉も附けず、假綴のまゝで郵送せられて來た時には、少しは變だと思はぬでもなかつたが、まさか序文をと言はれようとは氣が付かぬからつい讀んだ。ちやうど折あしくか又は折よくか、防空演習や何かで書くべきものも書けず、やたらに本ばかり讀んで居た際なので、うっかり釣り込まれて皆讀んだばかりか、うちへ來る人たちに飛び飛びにでも見せたいと思つて、赤インキを以て線を引き書き入れをして、もう返せと言つ

て來ても返せなくなつて居た。ちやうど其頃を見すまして、序文を書いてくれといふ赤川君の手紙が、到着するやうに仕組まれて居たのである。それは偶然のしあはせなど、微笑するにきまつて居るが、私のみはさうは思へない理由をもつて居る。前年大曲の文化協會が、彼を介して講演を頼みに來たときに、私は酔だの葛藤だのと言つて中々承引しなかつた。さうすると赤川君は忽ち話頭を轉じて、此頃は仙北地方は山の青物が多いといふことを言ひ出した。いやシホデコだシドケだアイだホナだ、あれはどうして食ふのが一番うまいなど、丸で私が初物道樂であることを、見抜いたやうな懸け引きであつて、内心癢にさはりつゝも、そんなら行くよと謂つておめくくと引張つて來られた。つまりは今度もまた遣られたのである。斯ういふ人が居るから秋田も輕んずることが出來ない。負けてしまつてから片意地を張つても、さう器量は好くならない。よろしいもう一べんだけ、彼の術中に陥つてやれ、といふ心持を以てこの序文は書くのである。其代りどんな事を書いてしまふかわからないといふ、覺悟だけはして居なければなるまい。

私は自分の家が秀卿流の藤原氏である爲に、夙くから東北の佐藤族の分布に注意して居たが、この雄物川中流の平野に、斯んな活氣の溢ち溢れた一まきが、土著して居たことは始めて知つた。家の繁昌と歴史の古さとは勿論關係が無い。寧ろ久しく雌伏して居たればこそ、新たに大いに顯れることも出來たので、現に平泉や信夫の總本家は、絶えて夏草の夢の跡となつて居るのである。しかし兎に角に何十代かの遠い縁つゞき、同じ龍宮の俵の米を食べて、育つた子供等の末の末に、まだ是だけの發展性が残つて居たといふことは、自分の家にとつても心強い實例であつて、それが何等の特殊なる幸運に基づかず、單に普通の人間の具へ得べき幾つかの好條件の組合せを以て、いつと無くこの立派な親方衆をこしらへ上げたといふのだから、愈々以て我々の前途は頼もしいのである。

或は是を以て東北だから、近世急激に文化の恩恵に霑はうた地方だから、たま／＼斯うなつたのだと見る人もあるか知らぬが、假にさうだつたと決すれば、それも亦明るい希望である。現今の東北は一般に、人が自ら憐むの念ばかり強く、理由も無く環境の力を見縊

つて、拔駆けして我獨り都府の利害に迎合するより他に、出て行く途は無いかの如く思ふ者が増加しようとして居る。そんな事をしなくても平氣で生きて行かれるといふ近頃の例が、もし一つでも二つでも眼の前に有るとすれば、少なくとも我々は別の活き方を考案することが出来るのである。眞似をして見たところが始まらぬことは判つて居る。是が好い御手木かどうかは後にきまる問題だが、とにかくにもつと事實を明確に知るといふことが根本の經濟教育であるといふことを、心付かせる材料としては斯ういふものが、必要なのである。佐藤家の後裔がたゞ父祖の恩徳を尊び、永く追慕の情を繋がりといふ志だけならば、この日記の如きは綺麗に複寫して、めい／＼の家御佛壇の隅に置いても濟む。それを此通り活字に組み本に仕立て、遠い遠縁の自分如き者までが、讀める様にこしらへて居るのは、恐らくは別に第二段の利用者があつて、其方が却つて重要であることを意識して居るからであらう。果してさうならば、この一門の拮据經營を觀望すること、恰かも野山の一本の樹木の、歳を重ねて高く伸び行くのに對する如く、家と世の中とを絡んだ義理や

人情、さしにも皆さんの胸を浪打させた人生の喜怒哀樂を、まるで蔦かづらの紅葉か苔の緑、鳥の聲か雲の影、さては嵐や霜雪の風情をもてはやすやうに、靜かな態度を以て眺めて居る者があつたとても、冷淡だなどゝ怒つてはいけない斯うして始めて我々の生存は次に來る者の爲に意義が有るのである。

そんなことを言つても讀む人が無いだらう。讀んでこの底に流れて居る何物かを、掬み上げ味はひ取ることは出來まいと、思つて居る人があるか知らぬが、もしそれを誘ふことが出來ぬやうだつたら、赤川君などは腕が無いのであり、實際又私といふ一人だけは、とろ／＼取つかまつて讀まされてしまつたのである。私は誠にそ／＼つかしい讀書子であるがそれでもこの一巻の記録によつて、人が長者になる法則をちよつくらと學ぶことが出來た。少なくとも明治の後半、秋田縣中部の低地でならば、斯うすればきつと家が榮えたといふことが、かなり簡明に此日記の中には書いてある。萩澤の佐藤氏の歴史には、むかしむかしの長者話のやうな、奇跡といふものは塵ほども無い。誰にも捉へ得られた一つの機會を

この家の祖翁は殊に安々と捉へただけである。翁の率直なる日記は其まゝが秘傳であつた。明治十六年の交には、米の値は河岸渡し百俵が百二十圓であつた。此邊は三斗俵らしいから一升四錢ほどの米である。それが年増しに少しづつ高くなつて、昭和十年頃には千百圓を上下して居る。汽車が近くを通つて搬出も容易になつて居るのである。假に産額が以前の通りであつても、他の物價は十倍にまでは揚つて居ないから、幾分かは残る筈であるのに、此家では夙に耕地増加の方針を立て、少しの無理な計略も無しに、いとも自然に持高を買ひ添へて行つたのである。逸話として傳へてもよいのは、主人の篤實と精勵とが信用であつたと見えて、大曲その他の知友から、土地を買ふ金の融通を受けて居たらしいが、月一分の金が借りられるので、誠に好都合だといふ述懐がどこかに見えて居る。幾ら東北でもさういふ高い金利は、久しくは續いて居なかつた筈である。さうすると一割二分の利廻りで購入した土地から、いつまでも同じ勘定の収益を得られることになるので、是も亦小さくない私經濟のくつろぎであつた。斯ういふ豫期せざる餘得は都會の地主にも、又前

前からの大農にもあつたので、決してこの家だけがうまい事をしたのでは無いが、なほ新たにさういふ好條件に恵まれたといふことは、計畫者にとつては恐らくは大いなる幸福感であり、それが轉じては又第二第三の事業に進出する、銳氣ともなつたことは想像し得られる。

但しこの様な金錢の勘定が、全部の説明にならぬのは勿論である。誰でも此日記を讀んで感ぜずに居られぬだらうことは、大よそ一軒の家の大きくなつて行く際に、必ず附いてまはるべき幾つかの狀況が、偶然ではあらうが殆ど皆備はり、しかもわざ／＼さうしよと努力したやうな痕跡の無いことである。是を列記して置くといふ参考になるのだが、あまりこま／＼としたことは私には書けない。たゞ一ばん大切のやうに思ふことは各員の生活力、親も子どもも毎々病氣をして、醫者や看護の勞を掛けるが、程なく又よくなつて元の通りに活動して居る。是は健康とか養生とかの問題とは別に、もつと根本の組織の、外からの壓迫に堪へるものがある爲では無いか。章君はあの通りの立派な最期、富之助氏に

も何か特別な事情があつたかと思ふがこの二人を除いては他は皆丈夫で、單なる長壽といふ以上に、年とつてまで氣力が衰へて居ない。是は何代と無く激しい勤務に鍛へられて、寒い雪國で活き抜いた家の餘得と思はれ、今まで計算に入れられなかつた東北人の一つの財産である。是を傷つけ損ふやうな新文化は、最も警戒して避けなければならぬのだが、知らずに居る位だから誰も粗末にして居る。たま／＼この家のやうな顯著な例に逢ふと、我々は驚かずに居られぬのである。

之と關聯して第二にはよく働くことである。金重翁などの勞働はもう習性になつて居た。越後地方に行けばもう帳場にも出ぬほどの境涯年齢で、田植には小苗打ち、稲刈には稲まゝるき乳穂積みまで、下人と一つになつて働いて居る。それが或は楽しみでもあつたのでは無いか。日記の中には詳しく共に働いた人の名を掲げ、その仕事の品目だけでも二十種に近いものが算へられるのである。私の推測では、是は或一人の篤農の心掛けのよさでは無く、寧ろ此地方の旦那衆の古くからの趣味であり、又常の日の生活であつて、それをこの

家でも何と無く續けて居ただけであらう。中世の郷士といひ地侍といはれた人たちでも、戦に出なければ狩でもして暮して居たやうに、思ふ人があつたらそれは大ちがひである。そんな事をして居れば鳥獸は根絶やしになり、それよりも第一米が作れやしない。主人が自ら出て働かねばならぬほど、手不足であつた氣遣ひは萬々無いが、是は大切な作物であつて、たゞ協同の空氣の中のみ、成育するものと考へられて居たのである。多くの田植歌に田主の富貴をたゞへ、又田主の嫁娘が、花のやうな化粧をして田に立つことを詠じて居るやうに、あらゆる人の力が集まらなければ、君と神とに奉るべき田の力は生れなかつたのである。如何なる農耕の畫卷を展げて見ても、一人で山の蔭に淋しく植ゑて居るものなどは無い。老女も縁兒も皆田の畔に寄りつどひ、子供は大きくなつて、早くあの中にまじつて働きたいと念じて居た。それが勞働自由の世になつて、先づ解放せられた者は當然に主翁であつた。曾てたちつけ袴に長い杖などを突いて、働く田人等を褒めて居た彼等が一ばん閑だと見られて公務に引出され、もしくはもつと重要な國事に奔走した。主翁が

出なくなれば嫁娘等も次第に辭職する。さうして地主は農民なりやといふ様な、問題が論議せられるまでになつたのである。さういふ中に在つても佐藤家の家風は、謹嚴なる菴菴翁の保守主義によつて、なほ暫らくは續いて居たかと思はれる。たとへば元氣のよい青年男女が、スキイや山登りで草臥れることを運動として居る傍に、あの忙がしい當主が僅かの時間を見つけて、長男を相手に歳の暮の障子貼りするなどは、昔なつかしく又ほゝましい好情景であつたが、それが果してもう何年ほどもくり返されるものであらうか。地主の將來と共に、我々の關心せざるを得ない問題である。

日記には數字を示されて居ないが、この家の手作も少しづつ縮小して居るかと思像せられる。それに一方の田地持添の方針はなほ續いて居るらしく、毎年の正月禮に集まつて來る作子の數が、ふえる一方で此頃はもう二百人に近くなつて居る。この人たちが純良にして常例を重んずることも、たしかに親方家の安泰を支持しては居るが、其待遇に就いても懇ろな考慮が拂はれて居る。或は斯ういふのが此地方の普通の振合ひであつたかも知れぬ

が、とにかくに是は床次氏等が唱へ始めた、所謂温情主義の産物で無く、父祖三代に互つて守り續けて居た慣行かとも思はれる。さういふ中でも遠近によつてやゝ等差があり、特に部落を同じうする小作人に厚いのを見ると、事によると是はこの家がまだ大きくなかつた頃からの交際を、わざと改革せずに居るのではないかと思ふ。主婦が字内三十何戸の盆禮に、片端からまはつてあるいたといふなども、他の地方では聞いたことも無い謙抑な態度であつた。地主の人望が屢々地元から崩れることを考へると、是は無意識にもせよ一つの統御のこつであつた。

それから親戚故舊の附合ひが行届き、出入といふべき人々のよくあしらはれて居ることは、よそ目にも楽しい富家の光景であつて、是が主人夫婦の隠れたる氣苦勞の種であると同時に、家に活氣を興へて、快く人を働かせる間接の力ともなつて居ることは、特に私たちの興味をもつ問題であるが、それまで話して居るとあまり長くなる。たゞ一言だけどうしても言つて見たいのは、本家分家の組織の目に見えぬ變遷である。佐藤金重翁壯年の頃

の手記に、安政から慶應への九年間に、二軒まで分家を立てたことは、申すばかり無き本家の迷惑であつた。晝夜辛苦艱難するものに候間、堅く分地立てざる様に致すべきものとあるのは、よく／＼の苦しい経験だつたらうと思はれるが、それにも拘らず家が段々とよくなり、又その必要の新たに生ずるに伴なうて、次々と更に五六軒の分家を出して居る。是は一家に取つてはたゞ繁榮の悦ばしい記念に過ぎぬかも知らぬが、社會史研究の上からは見道がすべからざる時代相、もしくは昔と今との大きなちがひを示して居る。同じ一つの名稱を以て呼ばれて居ても、この新舊二通りの分家は、目的が始めから異なり、従つて又性質もよほどかはつて居る。古い方の分地は文字通り、小分の土地を付與して出来るだけ近くに住ませ、本家の生業に對する協力を豫期して居た。ヲチヲバと奉公人分家の差はあつたらうが、共に最初から小農を仕立てる覺悟であつた。是に反して他の一方は、獨立して第二の大屋となることを計畫して居るから、近くに住んで居ると却つて競争などの氣まづいことが多い。親類の義理は缺かさぬまでも、經濟の連鎖は弱いものであつた。地

方によつてはこの二つのものを、別々の名で呼んで居る位に、本家との關係が大きくちがつて居るのだが、何處でもまだ經驗が十分でない爲に、是をはつきりと考へ分けることが出来ずに居る。今日は言はゞこの過渡期の混亂を、何とか處理しなければならぬ時代であるが、佐藤家歴代の主人の見透しは、この問題に就いてもほど適中して居たやうである。この家では明治十七年の嘉市君の家を最後として、もう舊式の分家百姓を立てることを罷めた。それから後々のものは分配を豊かにして、しかも其協力を當てにせず、寧ろ出来るだけ本家から引離して、將來對立の弊を避けようとして居る。恐らくは單なる骨肉の愛に絆されて、兒孫の膝を繞る幸福を味はおうとした人が、しば／＼門黨の不和を豫知し得なかつた不幸に鑑みたものであらう。しかも一方には是がワカゼ共の頻々たる出替りとなり又農場勞力の供給難となつて、結局は手作の縮小に歸すべきことは判つて居ても、もうそれを避けることが出来なかつたのは時世である。

萩澤歳時記は感慨の書でも無く、又咏歎の記録でもないに拘らず、なほ後代の讀者に向